

「世の罪を取り除く神の小羊」 ヨハ1:19～34

1. はじめに

(1) イエスの公生涯の開始

①バプテスマと誘惑は、連続した出来事である。

*神の子

*主のしもべ

②その直後のイエスの行動は、ヨハネの福音書だけに記されている。

③今日の箇所、神の国運動の中心が、ヨハネからイエスに移る。

(2) 世の罪を取り除く神の小羊 (A. T. ロバートソンの § 26、27)

① § 26 「サンヘドリンに対するヨハネの証し」 19～28 節

② § 27 「イエスをメシアと認識するヨハネ」 29～34 節

2. アウトライン

(1) ヨハネの証し (19～28 節)

(2) メシアの登場 (29～34 節)

3. メッセージのゴール

(1) ユダヤ人たち (19 節)

(2) パリサイ人 (24 節)

(3) 神の小羊 (29 節)

このメッセージは、ヨハネからイエスへの移行について学ぼうとするものである。

I. ヨハネの証し (19～28 節)

1. 第一の問い (19～20 節)

「ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、『あなたはどなたですか』と尋ねさせた。彼は告白して否まず、『私はキリストではありません』と言明した」

(1) サンヘドリンについて

①ローマから権限を委託された自治組織。司法、行政、立法機関。

②70名の議員と1名の議長(大祭司)

③3種類の構成員

- * 祭司長 (サドカイ派)
- * 律法学者 (パリサイ派)
- * 長老 (一般人の代表)

- (2) メシア運動 (神の国運動) に対するサンヘドリン (ユダヤ議会) の対応
- ① 代表団を派遣し、それが正当なものであるかどうかを判断する。
 - ② 「ヨハネの証言」とは、それに対してヨハネがどう答えたかということである。
 - ③ エルサレムからの代表団であることが、3度にわたって記載されている。

* 19 節、22 節、24 節

- (3) メシア運動の3段階

- ① 黙って観察する段階
- ② 審問の段階

* 代表団はバプテスマのヨハネに種々の質問をしている。

- ③ 結論を出す段階

- (4) 審問の内容 「あなたはどなたですか」

- ① ヨハネが授けている洗礼についての質問
- ② ヨハネの自己宣言についての質問

- (5) ヨハネの回答

「彼は告白して否まず、『私はキリストではありません』と声明した」(新改訳)

「彼は公言して隠さず、『わたしはメシアではない』と言い表した」(新共同訳)

- ① ホモロゲオウという動詞を2回使っている。強意。
- ② 「エゴウ・エイミ・ウーク・クリストス」(I am not the Messiah.)
- ③ ヨハネの福音書の中では、イエスは7回「I am …」と語っている。

2. 第2の問い (21 節 a)

「また、彼らは聞いた。『では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか』。彼は言った。『そうではありません』」

- (1) この質問の背景には、マラ4:5の預言がある。

「見よ。わたしは、【主】の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす」

- ① バプテスマのヨハネをエリヤの再来と考えていた人たちがいた。

(2) ヨハネの回答

「そうではありません」

①「エイミ・ウーク」(I am not.)

3. 第3の問い(21節b)

『あなたはあの預言者ですか』。彼は答えた。『違います』

(1) この質問の背景には、申18:15がある。

「あなたの神、【主】は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとり
の預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない」

①「あの預言者」とは、メシアのことである。

②しかし、「あの預言者」をメシアとは別の人物と考える人もいた。

(2) ヨハネの回答

「違います」

①「ウー」(No.)

②ヨハネの回答は、先に行くほど言葉数が少なくなっている。

4. 第4の問い(22~24節)

「そこで、彼らは言った。『あなたはだれですか。私たちを遣わした人々に返事をしたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか』。彼は言った。『私は、預言者イザヤが言ったように「主の道をまっすぐにせよ」と荒野で叫んでいる者の声です』。彼らは、パリサイ人の中から遣わされたのであった」

(1) 彼らは、サンヘドリンに回答を持って帰る必要があった。

①「祭司とレビ人」(19節)とは、サドカイ人のことである。

②ヨハネの福音書には、サドカイ人という呼称は出てこない。

*神殿崩壊以降に書かれている。

③代表団の中には、パリサイ人も含まれていた。

④サンヘドリンが派遣したことは、パリサイ人が派遣したのと同じこと。

⑤「あなたは自分を何だと言われるのですか」

(2) ヨハネの回答

①ヨハネは自分自身を、「荒野で叫んでいる者の声」と紹介した。

*イザヤ書40:3の引用。

*ヨハネは「声」であり、イエスは「ことば」である。

*ヨハネは、メシアの先駆者としての自分の使命をよく理解していた。

(例話) 第3回聖書フォーラムキャンプ 「I am not the Missiah.」

5. 第5の問い (25～28節)

「彼らはまた尋ねて言った。『キリストでもなく、エリヤでもなく、またあの預言者でもないなら、なぜ、あなたはバプテスマを授けているのですか』。ヨハネは答えて言った。『私は水でバプテスマを授けているが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。その方は私のあとから来られる方で、私はその方のくつのひもを解く値うちもありません』。この事があったのは、ヨルダンの向こう岸のベタニヤであって、ヨハネはそこでバプテスマを授けていた」

(1) 無資格の身でありながら、なぜバプテスマを授けているのか。

(2) ヨハネの回答

- ①水でバプテスマを授けているのは、メシアが現われるための準備である。
- ②メシアは確かにおられるが、まだ知られていない。
- ③メシアと比較すると、自分は奴隷以下の存在だ。

(3) 「ヨルダンの向こう岸のベタニヤ」

- ①ユダのベタニヤとは異なる場所である。
- ②エリコの東側
- ③現在では、イスラエルからもヨルダンからも、この場所に行ける。

II. メシアの登場 (29～34節)

1. その時が来た (29～31節)

「その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。『見よ、世の罪を取り除く神の小羊。私が「私のあとから来る人がある。その方は私にまさる方である。私より先におられたからだ』と言ったのは、この方のことです。私もこの方を知りませんでした。しかし、この方がイスラエルに明らかにされるために、私は来て、水でバプテスマを授けているのです」

(1) テンポの速い展開

①29節 「その翌日」

*サンヘドリンによる審問の翌日が、父なる神がメシアを示す日となった。

②35節 「その翌日」

③43節 「その翌日」

- ④2章1節 「それから三日目に」
- ⑤およそ1週間後にカナの婚礼となる。

(2) 「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」

- ①紀元1世紀のユダヤ人たちは、「小羊」について2つの概念を持っていた。
 - *過ぎ越しの小羊という概念。出エジプト12章から出てくる概念。
 - *メシア的小羊という概念。イザヤ53章から出てくる概念。
- ②ヨハネは両方の意味で、イエスを「神の小羊」と呼んでいる。

(3) 「私のあとから来る人がある。その方は私にまさる方である。私より先におられたからだ」

- ①イエスは人間としては、ヨハネよりも6か月後に誕生した。
- ②しかし、神の子としては、宇宙が創造される前から存在しておられた。
- ③イエスは人間性と神性の両方をお持ちになられた。
- ④ヨハネの奉仕は、すべてその方のためである。

2. 共観福音書の記録のまとめ(32～34節)

「またヨハネは証言して言った、『御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。「御霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である」。私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです』」

- (1) ヨハネの福音書には、イエスの洗礼の場面はない。
 - ①ヨハネは、イエスがヨハネから洗礼を受けたことを前提に書いている。
- (2) ヨハネの目撃情報
 - ①イエスの上に御霊が鳩のように天から下るのを見た。
 - ②「それで、この方が神の子であると証言しているのです」(34節)

結論：

1. ユダヤ人たち(19節)

- (1) エルサレムから使者を遣わしたのは、「ユダヤ人たち」である。
- (2) 新約聖書は反ユダヤ的書であるか。
 - ①ギリシア語で「ユーダイオイ」、ヘブル語で「イエフディム」

②これを「ユダヤ人たち」と訳すと、無意識の内にユダヤ人はメシアに敵対したというメッセージを伝えることになる。

③この言葉は、文脈によって注意深く解釈する必要がある。

(3) 3つの解釈が可能である。

①ユダ族の人たち

②ユダヤ民族(ユダヤ教徒たち)

③ユダヤ地方に住む人々(出身者たち)

*ヨハネは③の意味で使っている。

*エルサレムに住む宗教的指導者たちのことである。

2. パリサイ人(24節)

(1) バビロン捕囚期以降のユダヤ教

①捕囚により神殿が破壊され、祭司階級は職を失った。

②70年間(捕囚)で、律法を学ぶことが民族統一の鍵であるとの認識が生まれた。

③捕囚から帰還して以降の重要人物は、エズラである。

*彼は祭司であった。

*と同時に、律法学者(書記)でもあった。

④第二神殿の建設後、祭司階級の職業が復活した。サドカイ人の源流。

⑤エズラの教えに触発される人々が現れた。パリサイ人の源流。

*パリサイ派は、いわば平信徒の運動として発展した。

*イエスの時代、パリサイ人は約6,000人いた。

⑥サンヘドリンを構成していたのは、サドカイ人とパリサイ人である。

(2) メシア待望の高まり

①1世紀の最初の30年くらい

②ローマからの解放を達成する政治的メシア像

③超自然的登場

④あるいは、ダビデの家系から登場する王

(3) バプテスマのヨハネは異端児である。

①エルサレムの神殿とは無関係の所で、育った。

②正式なラビ教育を受けていない。

③無資格で働きを展開している。

*神殿やシナゴグに通うユダヤ人を自分のところに集めている。

*いわば、羊泥棒である。

④既成勢力から見ると、反発を覚える人物であるが、認めないわけにはいかない。

⑤審問を開始した時点では、サンヘドリンの立場は中立である。

⑥ヨハネは、日本の歴史で言えば、信長のような人物である。

*信長のような人物が登場する背景に、鉄器による農業生産の高まりがある。

*国力が飛躍的に増し、商品流通経済が発展する。

*そして、鉄砲が、戦争の形態を一変させた。

⑦日本の霊的壁を打ち破る可能性はあるか。

*万人祭司という概念の再確認

*ヘブル的解釈

*字義通りの解釈

3. 神の小羊 (29 節)

(1) イエスの自己認識

①神の子

②神のしもべ

(2) バプテスマのヨハネのメシア認識

①「神の子」(34 節)

②「世の罪を取り除く神の小羊」(29 節)

(3) 使徒たちのメシア認識

①1 コリ 5 : 7

「新しい粉のかたまりのままにしているために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです」

②1 ペテ 1 : 18~19

「ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです」

(4) アンケートにあった質問

①サタンは、訴える者である。

②根拠なく、訴える者である。

(例話) キャンプでの5人の受洗者の証し (福音の3要素)

「最初の弟子たち」 ヨハ1：35～51

1. はじめに

(1) イエスの公生涯の開始

- ①神の国運動の中心が、ヨハネからイエスに移った。
- ②イエスの最初の弟子たちは、バプテスマのヨハネの弟子たちであった。

(2) 最初の弟子たち (A. T. ロバートソンの §28)

(3) 弟子とは

- ①ユダヤ教の習慣では、ラビの周りに弟子たちが集まった。
 - *巡回ラビと定住ラビがいた。
- ②弟子とは、生徒（学ぶ者）のことである。
 - *ヘブル語で、タルミディム。
 - *全面的信頼関係があった（カルト的な意味ではなく）。
 - *目標は、知識、知恵、行動、人格において、師のようになること。
- ③ユダヤ教では、生徒は自分でラビを見つけることになっていた。
 - *イエスの場合は、その習慣は当てはまらない。

2. アウトライン

- (1) アンデレとヨハネ (35～40 節)
- (2) ペテロ (41～42 節)
- (3) ピリポ (43～44 節)
- (4) ナタナエル (45～51 節)

3. メッセージのゴール

- (1) 留まることの重要性
- (2) 可能性を見ることの重要性
- (3) 見られているという意識の重要性

このメッセージは、最初の弟子たちの召命について学ぼうとするものである。

I. アンデレとヨハネ (35～40 節)

1. 35～36 節

「その翌日、またヨハネは、ふたりの弟子とともに立っていたが、イエスが歩いて行かれ

るのを見て、『見よ、神の小羊』と言った」

(1) 「ふたりの弟子」

- ① アンデレと、もうひとは、この福音書の著者ヨハネであろう。
- ② バプテスマのヨハネは、自分の弟子を失うことになる。
*バプテスマのヨハネの使命は、メシアを指し示すことである。

(2) 「見よ、神の小羊」

- ① 過越の小羊 (出 12 章)
- ② 受難のしもべ (イザ 53 : 7)

2. 37～38 節

「ふたりの弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て、言われた。『あなたがたは何を求めているのですか』。彼らは言った。『ラビ(訳して言えば、先生)。今どこにお泊まりですか』」

(1) ラビが弟子を取るときのユダヤ的習慣

- ① 志願者は、ラビの教えに耳を傾けながら、距離を置いてその後について行く。
*この状態は、数時間から数日、場合によってはそれ以上続く。
- ② ラビが、「あなたは、何を求めているのか(誰を探しているのか)」と質問する。
- ③ 志願者は、「ラビ。今どこにお泊りですか(お住まいですか)」と問いかける。
*志願者は、ラビとの静かな対話を求めているのである。
- ④ ラビの回答
*「お前と何の関係があるのか」は、断りの言葉。
*「来なさい。そうすれば分かります」は、受容の言葉。

(2) ふたりの弟子の場合も、このステップに沿って話が進んでいる。

- ① 彼らは、イエスについて行った。
- ② イエスは、「あなたがたは何を求めているのですか」と問いかけた。
- ③ 彼らは、「ラビ(訳して言えば、先生)。今どこにお泊まりですか」と質問した。
*異邦人読者のために、ラビという言葉が解説している。
*日本語としては、「先生」よりも「師」の方がよいだろう。

3. 39～40 節

「イエスは彼らに言われた。『来なさい。そうすればわかります』。そこで、彼らについて行って、イエスの泊まっておられる所を知った。そして、その日彼らはイエスといっしょにいた。時は第十時ごろであった。ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのう

ちのひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった」

- (1) イエスは彼らを弟子として迎えた。
 - ① 「来なさい。そうすればわかります」は、第4のステップの回答である。
 - ② 恐らくイエスは、友人の家に宿泊していたのであろう。

- (2) この日、彼らはイエスをメシアと信じた。
 - ① 「時は第十時ごろであった」
 - *ユダヤ式時間では、午前6時から数えて第10時。午後4時。
 - *ローマ式時間では、午前0時から数えて第10時。午前10時。
 - *恐らく午前10時であろう(ヨハネの福音書はエペソで執筆された)。
 - ② 「そして、その日彼らはイエスといっしょにいた」
 - *午前10時から一日中。必ずしも泊まったということではない。
 - *イエスと親しく話し合った。
 - *その内容は、恐らく旧約聖書(律法と預言者)のメシア預言であろう。

II. ペテロ(41~42節)

1. 41節

「彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、『私たちはメシア(訳して言えば、キリスト)に会った』と言った」

- (1) 「彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて」
 - ① 何をするよりも先に自分の兄弟シモンを見つけてという解釈が多い。
 - ② 別の解釈が可能(ギリシア語のプロトス)
 - *ヨハネもまた自分の兄弟ヤコブを探した。
 - *しかし、アンデレの方が先に自分の兄弟を見つけた。
 - ③ いずれにしても、ふたりの弟子の熱意が伝わってくる。

- (2) 「私たちはメシア(訳して言えば、キリスト)に会った」
 - ① ユダヤ人が長年夢に描いてきたことが実現した。
 - ② これまで師であったバプテスマのヨハネが、この方を指し示した。
 - ③ 自らが、そのお方のそばに座り、心ゆくまでその教えに耳を傾けた。
 - ④ 書かれてはいないが、それを聞いたペテロは、戸惑ったことであろう。

2. 42節

「彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。『あ

あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ(訳すとペテロ)と呼ぶことにします』

- (1) イエスのもとに連れて来るのは、最善の方法である。
- (2) イエスの行為
 - ①彼に目を留めた。その本質を見極めた。
 - ②彼の名を呼んだ。「ヨハネの子シモン」は、「バル・ヨハネ・シモン」である。
 - ③彼に新しい名を与えた。
 - *「ケパ」はアラム語で岩という意味。
 - *ギリシア語では「ペテロ」(ペテロス)。これもまた岩という意味。

Ⅲ. ピリポ (43～44 節)

1. 43～44 節

「その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて『わたしに従って来なさい』と言われた。ピリポは、ベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった」

- (1) ガリラヤに帰ろうとされた時に、ピリポを見つけた。
 - ①今イエスはユダヤにいる。自宅のあるガリラヤに戻ろうとされた。
- (2) 今度は、イエスから招いている。
 - ①ユダヤ教の習慣にはないことである。
- (3) ピリポの背景
 - ①ベツサイダ出身 (ガリラヤ湖の北東にある町)
 - ②アンデレやペテロと同じ町の出身
 - ③この時、アンデレやペテロからイエスに関する情報を得たであろう。

Ⅳ. ナタナエル (45～51 節)

1. 45～46 節

「彼はナタナエルを見つけて言った。『私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです』。ナタナエルは彼に言った。『ナザレから何の良いものが出るだろう』。ピリポは言った。『来て、そして、見なさい』」

- (1) ピリポの熱意(情熱)が、彼をしてナタナエルを見つけさせた。

(2) 「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました」

①申 18 : 18 の預言

「わたしは彼らの同胞のうちから、彼らのためにあなたのようなひとりの預言者を起こそう。わたしは彼の口にわたしのことばを授けよう。彼は、わたしが命じることみな、彼らに告げる」

②旧約聖書の預言者たちの預言

(3) 「ナザレの人で、ヨセフの子イエスです」

①イエスは、「イエシュア・ベン・ヨセフ」である。

②「イエシュア・ベン・エロヒム」(神の子) という呼称も可能である。

③ヨセフはイエスの法律上の父であり、イエスを養育する責任があった。

(4) ナタナエルは、「ナザレから何の良いものが出るだろう」と応答する。

①これが、当時のユダヤ人の普通の反応である。

*メシアは、エルサレムか、ヘブロンから。

②ガリラヤ地方そのものが、エルサレムから見ると、格下の地方である。

③さらに、そのガリラヤ地方の中でも、ナザレは特に軽蔑の対象であった。

④ナザレは、旧約聖書にその名が出てこない村である。

(5) ピリポは、それ以上論じることはせず、「来て、そして見なさい」と言った。

2. 47～49 節

「イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。『これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りがない』。ナタナエルはイエスに言った。『どうして私をご存じなのですか』。イエスは言われた。『わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです』。ナタナエルは答えた。『先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です』

(1) ナタナエルに関する情報

「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りがない」

①イスラエルとはヤコブの別名である。

*父イサクを欺き、20年間も実家を離れて生活せざるをえなくなった。

②ナタナエルは、イスラエルという名にふさわしい人物である。

*先祖ヤコブのような偽りがない。

(2) ナタナエルの質問

「どうして私をご存じなのですか」

- ①自分に対するイエスの評価を否定していない。
- ②彼の疑問は、初対面の人が、どこからその情報を手に入れたのかということ。

(3) イエスの回答

「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです」

- ①イエスの神性
- ②「いちじくの木の下」
 - *安全、休息、黙想の場を示す。
 - *1列4:25、ミカ4:4、ゼカ3:10

(4) ナタナエルの告白

「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」

- ①「ラビ」と呼びかけている。
- ②旧約聖書の背景。2サム7:14、詩2:6~7。
- ③彼が、三位一体や受肉の真理を理解したということではない。

3. 50~51節

「イエスは答えて言われた。『あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったので、あなたは信じるのですか。あなたは、それよりもさらに大きなことを見ることになります』。そして言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます』」

- (1) イエスがメシアであることを、より確実な証拠をもって信じるようになる。
 - ①「それよりもさらに大きなこと」とは、ヨハ2~13章に出て来る奇跡である。

- (2) イエスは、ナタナエルが黙想していた箇所を言い当てている。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます」

- ①「まことに、まことに」は、「アーメン、アーメン」である。
- ②創28:10~12

「ヤコブはベエル・シェバを立て、ハランへと旅立った。ある所に着いたとき、ちょうど日が沈んだので、そこで一夜を明かすことにした。彼はその所の石の一つを取り、それを枕にして、その場所で横になった。そのうちに、彼は夢を見た。

見よ。一つのはしごが地に向けて立てられている。その頂は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしている」

③創 28 : 18~19

「翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを石の柱として立て、その上に油をそそいだ。そして、その場所の名をベテルと呼んだ。しかし、その町の名は、以前はルズであった」

④一つのはしごが、天と地の間を結ぶ役割を果たしている。

*天使たちが上り下りしているのは、天と地のコミュニケーションである。

⑤ヤコブはここを、ベテル(神の家)と呼んだ。

(3) イエスは、天と地を結ぶ新しいコミュニケーションの方法である。

「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」(ヨハ 1 : 18)

(4) イエスは、新しいベテルとしてご自身を啓示された。

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」(ヨハ 1 : 14)

結論：

1. 留まることの重要性

(1) ギリシア語の「メノウ」という言葉

①38節の「今どこにお泊まりですか」

②39節の「イエスの泊まっておられる所」

③39節の「イエスといっしょにいた」

(2) 「メノウ」は新約聖書に112回出て来る。

①その内66回が、ヨハネが書いた書に出て来る。

②福音書に40回、1ヨハに23回、2ヨハに3回。

③その意味は、留まる、滞在する、続く、持ちこたえる、など。

(3) 神学的に最も重要な聖句は、ヨハ 15 : 4である。

「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがた

も、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません」(ヨハ15:4)

- ①情熱や熱意は、いつか冷める。
- ②継続する力は、イエスにとどまる(ネノウ) ことにある。

2. 可能性を見ることの重要性(イエスは、弟子たちの可能性に目を留めた)。

(1) アンデレは、脇役である。

- ①「シモン・ペテロの兄弟アンデレ」と呼ばれている。
- ②登場する時はいつも、人をイエスのもとに連れて来る。

*1:42(ペテロ)、6:4~9(少年)、12:20~22(ギリシア人)

(2) ペテロは、粗削りで、直情型の人間である。

- ①イエスは彼に、ケパ(ペテロ)という新しい名を与えた。
- ②教会誕生後、彼は岩のような役割を果たした。

(3) ピリポは、ごく普通の人である。

- ①ヨハネの福音書にしか情報はない。
- ②登場する時は、アンデレとの関係で出て来る。
- ③自分から積極的に求めるタイプではない。
- ④イエスから彼を招かれた。
- ⑤神の国の拡大のためには、ピリポタイプも必要である。

3. 見られているという意識の重要性

(1) ナタナエルの信仰の土台は、ここにある。

- ①カルト的リーダーシップの問題点は、不安感である。

(2) 詩139篇

「【主】よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと【主】よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高くて、及びもつきません」(1~6節)

「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください」(23~24節)

「最初の奇跡」 ヨハ2:1~11

1. はじめに

(1) イエスの弟子たちが集められた。

①彼らは、バプテスマのヨハネの弟子たちであった。

②ナタナエルへの約束

「イエスは答えて言われた。『あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったので、あなたは信じるのですか。あなたは、それよりもさらに大きなことを見ることになります』」(ヨハ1:50)

③聖書の章や節の区分は、人工的なものである。

④ナタナエルへの約束が早速成就するのが、この出来事である。

(2) この奇跡は、ヨハネの福音書にのみ出て来るものである。

①マタイはまだ召命を受けていない。

②この体験をしたのは、ヨハネだけである。

(3) 最初の奇跡 (A. T. ロバートソンの § 29)

2. アウトライン

*一枚の絵画を見るように、視点が移動し、最後は画家の意図に着地する。

(1) イエスの母 (1~5 節)

(2) イエス (6~10 節)

(3) 弟子たち (11 節)

3. メッセージのゴール

(1) 「時」という言葉の意味

(2) 「しるし」という言葉の意味

(3) 最初の奇跡の象徴的意味

このメッセージは、最初の奇跡について学ぼうとするものである。

I. イエスの母 (1~5 節)

1. 1~2 節

「それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、そこにイエスの母がいた。

イエス

も、また弟子たちも、その婚礼に招かれた」

- (1) 場所はガリラヤのカナである。
 - ①現在、ナザレとテベリヤの間に、クファル・カナというアラブ人の村がある。
 - ②聖書時代のカナは、現在のカナよりも北にあったと思われる。

- (2) 主役は、新郎新婦ではなく、イエスの母である。
 - ①ヨハネは、マリアという名を記さずに、「**イエスの母**」としている。
 - ②彼女は、単なる客ではなく、婚礼を開催する側の人間になっている。
 - ③恐らく、新郎新婦との親戚関係か、友人関係のゆえであろう。
 - ④花婿が花嫁を迎えに行き、自分の家に連れて来る。
 - ⑤それから、婚礼が始まる。通常1週間続いた。それ以上の場合もあった。

- (3) イエスもまた、その婚礼に招かれた。
 - ①マリアの息子だから。
 - ②イエスは、ごく普通のユダヤ人男性として、この社会的行事に参加している。
 - ③弟子たちは、ラビとタルミディムの関係のゆえに、招かれた。

2. 3節

「ぶどう酒がなくなったとき、母がイエスに向かって『ぶどう酒がありません』と言った」

- (1) 「ぶどう酒がなくなったとき」
 - ①準備していた量のぶどう酒では、不足する場合がある。
 - *その場合、新郎とその父は、大いに面目を失う。
 - (例話) 中東での食事の形式。有り余るほど出す。
 - ②招待客は、贈り物を持ってきている。
 - *途中で食事やぶどう酒がなくなった場合、訴訟沙汰になることもあった。

- (2) 母がイエスに助けを求めた。
 - ①ユダヤ人の母が、息子に圧力を加えることはよくある。
 - ②夫ヨセフが死んでいたので、息子に相談するのが習慣になっていたのであろう。
 - ③イエスが奇跡を行ってくれることを期待していたわけではないだろう。
 - ④イエスはまだ一度も、奇跡を行っていない。
 - (例話) 集会中に息子の名を呼ぶ母親

3. 4節

「すると、イエスは母に言われた。『あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の

方。わたしの時はまだ来ていません』」

(1) 「女の方」

- ①「婦人よ」(新共同訳、口語訳)
- ②「をんなよ」(文語訳)
- ③これは、ギリシア語で「グネイ」(グナイという呼びかけ)という言葉である。
- ④決して見下した言い方ではない。
- ⑤ヨハ19:26

「イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に『女の方。そこに、あなたの息子がいます』と言われた」

(2) 「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか」

- ①ヘブリスの表現。この言葉には、2つの使用方法がある。
 - *叱責する場合
 - *優しく拒否する場合(ラビが弟子にすることを断る場合)
- ②イエスは母に、次元が異なることを教えようとしている。
 - *マリアは、家庭内におけるルール(親子関係)を持ち出している。
 - *婚礼の場は、私的空間ではなく、公的空間である。
 - *イエスは、公生涯に入っている。

(3) 「わたしの時はまだ来ていません」

- ①「わたしの時」とは、十字架と復活のこと。
- ②イエスは、2つのことを言っている。
 - *自分が行動を起こす時は、まだ来ていない。
 - *自分は、父なる神の御心だけを行う。

4. 5節

「母は手伝いの人たちに言った。『あの方が言われることを、何でもしてあげてください』」

(1) 母の従順

- ①イエスのことばをすべて理解したわけではない。
- ②しかし、イエスに従おうという姿勢が見える。
- ③母は、手伝いの人(ディアコノス)に指示を出すような役に就いていた。

(2) 私たちへの教訓

- ①母としてイエスに近づいたが、拒否された。
- ②信者としてイエスに委ねると、願いは聞かれた。

(3) ここから、母は後ろにさがり、イエスが中心に立つ。

II. イエス (6～10 節)

1. 6 節

「さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、それぞれ八十リットルから百

二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあった」

(1) 「ユダヤ人のきよめのしきたり」

- ①モーセの律法の要求ではなく、ユダヤ教の口伝律法である。
- ②宗教熱心なユダヤ人たちは、食前と食後に手を洗った。きよめのために。

(2) 6つの石の水がめ

- ①恐らく、家の外に置かれていたのであろう。
- ②婚礼の客のために、大量の水が必要であった。
 - * 「2、3メトレテス」。1メトレテスは約40リットル。
 - * 80リットルから120リットル。
- ③石の水がめは永続的に使用できる。
 - * 土器と違って、きよめることができる。

④レビ 11 : 33

「また、それらのうちの 하나가、どのような土の器の中に落ちて、その中にあるものはすべて汚れる。その器は碎かなければならない」

⑤この奇跡は、ユダヤ教の口伝律法が支配している状況下で行われた。

2. 7～8 節

「イエスは彼らに『かめに水をいっぱい入れなさい』と言われたので、彼らは口の

までいっぱいに入れた。そこで彼らに言われた、『さあ、くんで、料理がしらのと

持って行きなさい』すると、彼らは持って行った」

(1) 石の水がめの水を飲むのは、ユダヤ人にとっては、考えられないことである。

- ①しかし、マリアの指示を受けていた手伝いの者たちは、イエスに従った。
- ②口のところまでいっぱい入れたのは、ワインを入れたという疑惑をなくすため。

(2) 水をくんで、料理長のところに運んだのは、使いの者たち。

- ①イエスは、石の水がめに触れてもいない。
- ②イエスが願ったなら、瞬時にそのようになった。
- ③いかなる疑惑の余地もない。

3. 9～10節

「料理がしらは、ぶどう酒になった水をなめてみたが、それがどこからきたのか知らなか

ったので、(水をくんだ僕たちは知っていた)花婿を呼んで言った、『どんな人でも、初め

によいぶどう酒を出して、酔いがまわったころにわるいを出すものだ。それだけに、あ

なたはよいぶどう酒を今までとっておかれました』

(1) 料理長の驚き

- ①花婿が用意したぶどう酒だと思った。
 - *このぶどう酒は、イエスから花婿への贈り物である。
- ②花婿の人格をほめた。
 - *俗人のやり方とは、正反対である。
 - *奥ゆかしく、さりげない。

Ⅲ. 弟子たち (11節)

1. 11節

「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行い、その栄光を現された。そして弟

子たちはイエスを信じた」

(1) 「最初のしるし」

- ①ギリシア語で「セイメイオン」である。
- ②イエスのメシア性を示す「しるし」である。

(2) 「その栄光を現された」

- ①ここでは、神の力の啓示である。

(3)「そして弟子たちはイエスを信じた」

- ①彼らが、イエスの死と復活まで理解したということではない。
- ②彼らの信仰は、漸進的啓示によって、試され、発展させられていく。

結論：

1. 「時」という言葉の意味

「すると、イエスは母に言われた。『あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません』」(4節)

(1)「時」とは、十字架と復活の時である。

- ①イエスの自己認識。神の子であり、主のしもべである。
- ②これは、父なる神の御心を全うする時である。
- ③また、父の栄光と子の栄光が現れる時である。

(2)ギリシア語で「ハウラ」か「カイロス」である。

①「時はまだきていない」 5箇所

*ヨハ2:4、7:6、8、30、8:20

②「時がきた」 3箇所

*12:23、13:1、17:1

③ヨハ13:1

「過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された」

(3)母の要求と、イエスの行動原理の間に大きな隔りがある。

①「メシアの生涯」の学びは、「イエスの時」に向かって前進する作業である。

2. 「しるし」という言葉の意味

(1)この奇跡は、すべての奇跡の原型である。

- ①福音書に記されたイエスの奇跡は、35ある。
- ②最初の奇跡が理解できると、他の奇跡はすべて理解できる。

(2) これは、私的な奇跡である。

- ①目撃したのは、弟子たち(タルミディム)、召使たち、イエスの母。
- ②すべての人が、「神の栄光」を見たわけではない。
- ③そのように、「しるし」を見ても、すべての人が信じるわけではない。

(3) 「しるし」は、イエスのメシア性の証明

①7日間という枠組み

*その翌日 1:29、35、43

*それから3日目 2:1

*バプテスマのヨハネがイエスを神の小羊と認識した日から1週間。

②ヨハネは象徴的な言葉や数字を用いる。

*神は7日間で天地を創造された。

*イエスは、受肉した神のことばであり、この世に再創造をもたらされる。

③毎年、農業と発酵の過程を通して、神は水をぶどう酒に変えておられる。

*ここでは、イエスは短時間の内にそれを行われた。

*イエスは、創造主である。

3. 最初の奇跡の象徴的意味

(1) モーセとイエスの対比

①モーセは、裁きのしるしとして、水を血に変えた(出7:14~24)。

②イエスは、祝福のしるしとして、水をぶどう酒に変えた。

(2) ユダヤ教の口伝律法とイエスの教えの対比

①きよめの洗いは、人間が考え出したしきたりである。

*人を束縛する。

*人を変える力はない。

*6は恐らく象徴的数字であろう。完全数の7にひとつ不足している。

②イエスは、喜びをもたらされた。

*イエスには人を作り変える力がある。

③2 コリ 5:17

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いもの

は過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」

(3) このしるしの意味を理解した者は、それ以外のすべてのしるしを理解す

2012年8月12日（日）、13日（月） 23回目 V-029
最初の奇跡

る。

「最初の宮清め」 ヨハ2:12~22

1. はじめに

- (1) イエスの弟子たちが集められた。
 - ①彼らは、バプテスマのヨハネの弟子たちであった。
 - ②イエスは、カナの婚礼において最初の奇跡を行われた。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

- ①カペナウムへの短期訪問 (§ 30)
- ②最初の宮清め (§ 31)

(3) カペナウムでの短期滞在 (12 節)

「その後、イエスは母や兄弟たちや弟子たちといっしょに、カペナウムに下って行き、長い日数ではなかったが、そこに滞在された」 (12 節)

- ①エルサレム訪問に移るための、つなぎの聖句である。
- ②カペナウムがイエスの活動のホームベースになる予感がある。
- ③家族と別れて活動に入る。
- ④ナザレを離れて活動に入る。

(4) 場所的展開に注目

- ①ヨルダン川の東側→②ガリラヤのカナ→③ガリラヤ湖畔のカペナウム→④エルサレム→⑤サマリヤ→⑥ガリラヤ

2. アウトライン

- (1) イエスのメシア宣言 (13~17 節)
- (2) ユダヤ人たちの視点 (18~20 節)
- (3) 弟子たちの視点 (21~22 節)

3. メッセージのゴール

- (1) イエスの愛の本質
- (2) イエスの預言の意味

このメッセージは、最初の宮清めについて学ぼうとするものである。

I. イエスのメシア宣言 (13~17 節)

1. 宮の状況 (13～14 節)

「ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。そして、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、」(13～14 節)

(1) 「ユダヤ人の過越の祭り」

- ①過越の祭り、七週の祭り (ペンテコステ)、仮庵の祭りは、巡礼祭。
- ②ヨハネは、エルサレムが滅んだ後に、教会全体のためにこの福音書を書いた。
- ③イエスは、ユダヤ人の男子として過越の祭りを祝うためにエルサレムに上った。

*これは、公生涯に入ってから初めてのエルサレム訪問であった。

*地理的な意味でも、霊的な意味でも、「上り」に当たる都である。

(2) 「宮の中に」

- ①「宮」は、ギリシア語でヒエロン。

*「宮の中」とは、異邦人の庭のことである。

- ②「神殿」(19 節) は、ギリシア語でナオス。

*聖所・至聖所の建物ことである。

(3) 「牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、」

- ①巡礼者の便宜を図るために、いけにえの動物を売っていた。

- ②両替人もいた。

*ローマのデナリ貨は、像が彫られているために、使用不可。

*ツロ貨(銀の含有量が多い)を使用する。

- ③いけにえの購入のため

- ④神殿税を支払うため

*登録された成人男子は、2分の1 シェケルを納める(出 30 : 13)。

*ペテロが釣った魚の口からスタテル1枚が出て来た(マタ 17 : 27)。

*ギリシア貨幣の1 シェケルであり、2人分の「宮の納入金」に相当する。

2. イエスの怒り (15～16 節)

「細なわでむちを作って、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒し、また、鳩を売る者に言われた。『それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない』」(15～16 節)

- (1) イエスは、いけにえを捧げることを否定しているのではない。

- ①いけにえを捧げる目的が破壊されていることを怒っておられる。

- (2) イエスは、いけにえの動物、商人、両替人を、宮から追い出した。

①神殿を清める方が突然来るという預言は、マラ3:1~3にある。

(3) 「わたしの父の家を商売の家としてはならない」

① 「わたしの父の家」

*ルカ2:49では、「父の家」はイエスの自己認識を示す言葉となっていた。

*ここでは、イエスのメシア宣言となっている。

*イエスは、父なる神を啓示する方である(マタ11:27)。

② 「商売の家としてはならない」

*商人や両替人たちに営業許可を与えていたのは、サンヘドリンであった。

*サドカイ人やパリサイ人は、彼らから歩合を取っていた。

*特に、大祭司の一家が大きな利益を得ていた。

*神殿での礼拝をファミリービジネスに変えていた。

3. 弟子たちの驚き(17節)

「弟子たちは、『あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす』と書いてあるのを思い起こした」(17節)

(1) 詩69:9の成就

①真の礼拝を回復することへの情熱

②不信仰な者からの迫害がやって来る。

(2) 公生涯の中の宮清め

①公生涯の最初に、宮清めを行った。

②公生涯の最後にも、宮清めを行った。

*これが十字架に付けられる直接的原因となった。

(3) 公生涯の最初から、メシアに敵対する勢力の大きさが窺える。

II. ユダヤ人たちの視点(18~20節)

1. ユダヤ人たちの要求

「そこで、ユダヤ人たちが答えて言った、『あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちにを見せてくれるのですか』」(18節)

(1) 「ユダヤ人たち」とは、神殿域を管理している人たちであろう。

①ユダヤ人たちは、権威をもって行動する者へ敬意を表する。

- ②預言者たちの系譜がある。
- ③メシア待望がある。

(2)「あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちにを見せてくれるのですか」

- ①「このようなこと」とは、メシアとして行動。
- ②「しるし」とは、メシアであることを証明する奇跡。
- ③1 コリ 1 : 22

「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します」

2. イエスの回答

「イエスは彼らに答えて言われた。『この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう』(19節)

- (1) イエスは、信仰のない者のために時間を無駄にしない。
 - ①求道のための疑問と、否定のための疑問がある。

- (2) イエスの回答は、たとえ話と同じ原理を持っている。
 - ①聞く人には、謎めいている。
 - ②すぐには分からないので、聞き手は考えざるを得なくなる。
 - ③真理を求める者には、やがて解き明かしが与えられる。

- (3) 「この神殿をこわしてみなさい」
 - ①常識的には、神殿(ナオス)を指していると聞こえる。
 - ②しかし、イエスはご自身の体を指している。

- (4) 「わたしは、三日でそれを建てよう」
 - ①預言者ヨナのしるし(マタ 12 : 38~40)
 - ②これは、イエスの復活の預言である。

3. ユダヤ人たちの驚き

「そこで、ユダヤ人たちは言った。『この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか』(20節)

- (1) ヘロデ大王による神殿拡張工事
 - ①ヨセフスの記録によれば、ヘロデの第18年(前20~19年)に開始。
 - ②それから46年後は、紀元27~28年。

- ③この工事は、紀元63年まで続く。
- ④そして、紀元70年に破壊される。

(2) 「あなたはそれを、三日で建ててるのですか」

- ①「あなた」に強調点がある。

(3) ユダヤ人たちの誤解

- ①イエスのことばは、命令形(条件節)であるが、ユダヤ人たちは誤解した。

- ②イエスの裁判の場面

「偽証者がたくさん出て来たが、証拠はつかめなかった。しかし、最後にふたり
の者が進み出て、言った。『この人は、「わたしは神の神殿をこわして、それを三
日のうちに建て直せる」と言いました』(マタ26:60~61)

- ③ステパノの殉教の場面

「そして、偽りの証人たちを立てて、こう言わせた。『この人は、この聖なる所と
律法とに逆らうことばを語るのをやめません。「あのナザレ人イエスはこの聖なる
所をこわし、モーセが私たちに伝えた慣例を変えてしまう」と彼が言うのを、私
たちは聞きました』(使6:13~14)

Ⅲ. 弟子たちの視点(21~22節)

1. 21~22節

「しかし、イエスのご自分のからだの神殿のことを言われたのである。それで、イエスが
死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い
起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた」

(1) 復活後の視点

- ①弟子たちもまた、イエスのことばの意味を理解しなかった。
- ②メシアの死は、弟子たちの考えの中にはなかった。
- ③イエスの復活を目撃して以降、神殿とはイエスの体であることを理解した。

(2) 今は分からなくても、やがて分かるようになる。

- ①復活を目撃した。
- ②イエスのことばを思い起こした。
- ③聖書とイエスが言われたことばとを信じた。
- ④信仰の前進がある。

結論：

1. イエスの愛の本質

(1) 恵みと義は、同じコインの裏表である。

①恵みのない愛はなく、義のない愛もない。

(2) イスラエルの民は、出32章と同じ状態にあった。

①2枚の石板の破壊(裁きの要素)

②2枚の石板の再提供(恵みの要素)

(3) ロマ1:18~32

「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬度と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです」(ロマ1:18)

(4) イエスの怒りは、神の栄光が汚されていることへの怒りである。

①礼拝の重要性

*神殿の重要性

*エルサレムの重要性

②神の栄光がクリスチャン生活のゴールである。

2. イエスの預言の意味

(1) イエスの預言には、死と三日目の復活ということ以上の意味がある。

(2) 礼拝の改革

①神殿といけにえを中心とした礼拝は、終わろうとしている。

*イエスは古いものを破壊し、新しいものを創造しようとしている。

②エルサレムからの帰路、サマリヤの女に語られたことば

「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません」

(ヨハ4:23~24)

③復活したイエスを通して、新しいいけにえを捧げる時代が来る。

④ロマ12:1

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です」

⑤クリスチャンとは、キリストにあつて古い人生を破壊し、新しい人生を再構築している人々である。

（例話）北方領土問題、尖閣諸島問題、竹島問題など。

「ニコデモとの対話」 ヨハ2:23~3:21

1. はじめに

(1) イエスのメシア宣言

- ①エルサレムでの過越の祭り
- ②宮清めを行われた。

(2) きょうの箇所は、エルサレム滞在中の出来事

- ①ロングショット
- ②2ショット
- ③編集者のコメント

(3) A. T. ロバートソンの調和表
ニコデモとの対話 (§ 32)

2. アウトライン

- (1) 人々の信仰 (2:23~25)
- (2) ニコデモの信仰 (3:1~15)
- (3) 福音の要約 (3:16~21)

3. メッセージのゴール

- (1) 救いに至る信仰
- (2) ユダヤ人伝道のモデル

このメッセージは、救いに至る信仰について学ぼうとするものである。

I. 人々の信仰 (2:23~25)

1. 多くの人々が信じた。

「イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行われたしるしを見て、御名を信じた」(23節)

(1) イエスはしるしを行った(複数)。

- ①ヨハネは、それがどのようなものであったか、記していない。
- ②恐らく、癒しであろう。
- ③宮清めの出来事はメシア宣言であり、しるしはメシア性の証明である。

(2) しるしについて

- ①しるしは、この箇所からマタ 12 章に至るまで、メシア性の証明として行われる。
- ②マタ 12 章のベルゼブル論争を境に、しるしの目的が変化する。

(3) 多くの人々が、御名を信じた。

- ①「御名を信じた」とは、イエスを信じたということである。
- ②ただし、その信仰の内容が問題である。
- ③彼らは、「イエスの行われたしるしを見て」、信じたのである。
- ④イエスを癒し主として信じたが、罪からの救い主として信じたわけではない。

2. イエスは彼らを信じなかった (24~25 節)

「しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである」

(1) イエスは、彼らの「信仰」を信じなかった。

- ①新共同訳「しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった」
- ②彼らの信仰は、しるしを見たために、一時的な興奮状態に陥った信仰である。
- ③この種の信仰は、救いに至る信仰ではない。

(2) イエスは、人の心の中を知っておられた。

- ①1 サム 16 : 7、使 1 : 24~25
- ②イエスが信用した人はいるのか。
 - *ニコデモ (2 : 25 と 3 : 1 のつながりは、明白である)
 - *サマリヤの女

II. ニコデモの信仰 (3 : 1~15)

1. ニコデモとの対話

(1) ヨハネは、7つの対話を記している。

- ①これが最初の対話である。
- ②テーマは、「新生」(新しい生まれ変わり) である。

(2) ニコデモは、紀元 1 世紀のユダヤ教徒の最高峰である。

- ①最高峰とメシアの対話は、かみ合わない。
- ②紀元 1 世紀のユダヤ教が、いかに神の規準から離れていたかが分かる。

③ユダヤ的視点で読まなければ、この対話の深い意味は分からない。

2. 1～2節 a

「さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。この人が、夜、イエスのもとに来て言った」

(1) 彼は、「パリサイ人」である。

- ①死者の復活を信じていた(サドカイ派とは異なる)。
- ②ユダヤ人として生まれた者は、すべて救われると信じていた。
- ③バプテスマのヨハネは、これを否定していた(マタ3:9)。

(2) 彼は、「ユダヤ人の指導者」である。

- ①ラビであり、サンヘドリンの議員である。
- ②その彼が、イエスが神からの教師であることを認めた。

(3) 彼は、「夜」イエスのもとに来た。

- ①ヨハネの福音書では、「夜」には深い意味がある(否定的な意味)。
- ②ニコデモは、人目を避けて来たのであろう。

3. 2節 b

「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなされるこのようなしるしは、だれも行うことができません」

(1) ニコデモの挨拶

- ①イエスは、「ラビ(先生)」である。
- ②イエスは、「神のもとから来られた教師」である。
*原文では、この言葉に強調がある。
- ③「私たち」とは、イエスを受け入れる他の議員たちであろう。
*アリマタヤのヨセフ、ラビ・ガマリエルなど。

(2) ラビという呼びかけは、イエスに対して敬意を表したものである。

- ①ニコデモは、ラビ対ラビの対話を求めている。

4. 3節

「イエスは答えて言われた。『まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません』」

(1) イエスの応答

- ①なぜ夜に来たのかという叱責はない。
- ②ニコデモのほめ言葉に応答することもない。
- ③ただちに、本論に入る。

(2) 本論の内容

- ①「まことに、まことに」は、強調の言葉である。
- ②「新しく生まれなければ」は、新生の必要性を教える言葉である。
 - *ギリシア語の「アノウセン」である。
 - *「上から生まれなければ」とも訳せる。
 - *両方の意味を込めて、「上から、新しく生まれなければ」と理解すべき。
- ③「ボーン・アゲイン」
 - *1970年代に広まった用語である。
 - *本来は、ユダヤ的用語である。
 - *ニコデモの理解と、イエスの教えの間に隔たりがあることが問題である。
- ④「神の国を見ることはできません」
 - *ヨハネの福音書では、「神の国」という言葉は、2回しか出てこない。
 - *ヨハネの関心は、永遠の命にある。
 - *ここでの「神の国」とは、神の支配のことである。
 - *目に見えない神の国は、やがてメシア的王国として地上に実現する。

5. 4 節

「ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることができますでしょうか。」」

(1) ニコデモは、「新しく生まれる」という言葉を知っていた。

- ①「老年になっていて」が、キーワードである。

(2) パリサイ的ユダヤ教が教える6つの新生の方法

- ①異邦人がユダヤ教に改宗した時
- ②王になった時
- ③バール・ミツバ(13歳)を終えた時
- ④結婚した時(サンヘドリンの議員になる資格は、既婚者であること)
- ⑤30歳でラビになった時
- ⑥イエシヴァ(神学校)の校長になった時(通常は50歳)
 - *「イスラエルの教師」(10節)には定冠詞が付いている。

(3) 上記①と②はニコデモに該当せず、③から⑥はすべて終わっている。

- ①「もう一度、母の胎に入って生まれることができますでしょうか」
- ②人生やり直しの可能性はあるか。

6. 5～6節

「イエスは答えられた。『まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です』

- (1) 「まことに、まことに」は、重要な教えであることを示している。
 - ①アーメン、アーメン。
- (2) 「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません」
 - ①パリサイ派神学の否定である。
 - ②「水によって生まれる」とは、自然の誕生のこと。
 - ③「霊によって生まれる」とは、聖霊による超自然的な誕生のこと。
- (3) 「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です」
 - ①ラビ的教授法が、ここに見られる。自然と超自然の対比

7. 7～8節

「あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです」

- (1) ラビ的教授法
 - ①知っていること（自然現象）から始めて、知らないこと（超自然現象）へ。
- (2) 風の働きと、聖霊の働きの対比
 - ①ともにヘブル語で「ルア」である。
 - ②目には見えないが、結果は見える。

8. 9～10節

「ニコデモは答えて言った。『どうして、そのようなことがありうるのでしょうか』。イエスは答えて言われた。『あなたはイスラエルの教師でありながら、こういうことがわからないのですか』」

(1) ニコデモの限界が露呈した。

- ①彼は、知的混乱に陥った。「知っています」と言っていた(2節)。
- ②彼は、地上の領域でしかものごとを考えていない。

(2) イエスは驚かれた。

「あなたはイスラエルの教師でありながら、こういうことがわからないのですか」

- ①神学校の校長が、信仰の基本を理解していないのである。
- ②イザ32:15、エレ31:33、エゼ36:25~27など。

9. 11~13節は、イエスが天から下った方であり、天上の真理を語っていることを示す。

10. 14~15節

「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです」

(1) ニコデモへの個人伝道。民21:8~9

「すると、【主】はモーセに仰せられた。『あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上につけよ。すべてかまれた者は、それを仰ぎ見れば、生きる』。モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上につけた。もし蛇が人をかんでも、その者が青銅の蛇を仰ぎ見ると、生きた」

(2) 神の行為と人の行為

- ①青銅の蛇は上げられた。それと同じように「人の子」も上げられる。
- ②青銅の蛇を仰ぎ見た人は生きた。「人の子」を信じる者も生きる。

III. 福音の要約(3:16~21)

1. 16節

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」

(1) イエスのことばであっても、ヨハネの言葉であっても、結論は同じことである。

(2) イエス・キリストの福音の要約となっている。

- ①「世」とは、人間のことである。
- ②イエス・キリストを信じるかどうかで、道が分かれる。

*滅びの道と永遠のいのちの道

2. 17～21節

(1) 光と闇の戦い

- ①悪人が闇を好むのは、その行いが隠されるからである。
- ②真理を行う者が光を好むのは、その行いが光にさらされるためである。

結論：

1. 救いに至る信仰

(1) 神の御業

- ①ひとり子を、私たちの罪を贖うために犠牲にされた。

(2) 私たちの責任

- ①それを神からの贈り物として受け取る(信じる)こと。

(例話) Forever 21 のショッピングバッグにヨハ3:16が印刷されている。

2. ニコデモの救いは、ユダヤ人伝道のモデルである。

(1) ニコデモは、イエスのことばをすぐに理解したわけではない。

- ①次に来るのは、葛藤の段階である。
- ②現代のメシアニック・ジューも、同じところを通過する。

(2) ニコデモは、イエスを逮捕するかどうかに際して、先ずイエスを尋問するように要求した。ヨハ7:50～51。

- ①まだ信者ではない。

(3) アリマタヤのヨセフとともに、イエスを埋葬した。ヨハ19:39～40。

- ②信者になっている。

(4) ニクディモン・ベン・グリオンという名がタルムードに出て来る。

- ①エルサレム在住の、尊敬されていた裕福なユダヤ人
- ②エルサレムの3人の義人のひとり
- ③職業は井戸掘り。
- ④彼の娘は、物乞いをして回った(ラビ文書の話である)。
- ⑤ニコデモは、霊的には豊かになった。

「バプテスマのヨハネの最後の証言」 ヨハ3:22~4:4

1. はじめに

(1) エルサレムにおいて

- ①過越の祭りで、宮清めを行った。メシア性の宣言。
- ②エルサレムに滞在中に、しるしを行った。メシア性の証明。
- ③多くの人々が、イエスを信じた。
- ④しかし、イエスは彼らを信用しなかった。
- ⑤ニコデモは、例外であった。

(2) きょうの箇所は、それ以降の出来事である。

- ①イエスとバプテスマのヨハネの働きが、一時期、並行して進む。
- ②バプテスマのヨハネは、捕えられる。
- ③イエスは、ガリラヤに帰還する。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

イエスとバプテスマのヨハネの並行した奉仕 (§ 33)

イエスがユダヤを去る理由 (§ 34)

2. アウトライン

- (1) バプテスマのヨハネの最後の証言 (3:22~30)
- (2) 福音記者ヨハネの解説 (3:31~36)
- (3) ユダヤからガリラヤへの移動 (4:1~4)

3. メッセージのゴール

- (1) 私たちに与えられている任務
- (2) ユダヤ式結婚のたとえの意味

このメッセージは、クリスチャンに与えられている特権について学ぼうとするものである。

I. バプテスマのヨハネの最後の証言 (3:22~30)

1. 22節

「その後、イエスは弟子たちと、ユダヤの地に行き、彼らとともにそこに滞在して、バプテスマを授けておられた」

- (1) イエスはエルサレムを離れた。

- ①エルサレムもまた、ユダヤの地にある。
- ②ここでの「ユダヤの地」とは、ユダヤ地方の田舎、荒野であろう。

(2) イエスはそこで、バプテスマのヨハネと同じような働きを展開した。

- ①バプテスマを授けていたのは、イエスではなく、弟子たちであった。
- ②この行為は、バプテスマのヨハネのメッセージを保証するものとなった。

2. 23～24 節

「一方ヨハネもサリムに近いアイノンでバプテスマを授けていた。そこには水が多かったからである。人々は次々にやって来て、バプテスマを受けていた。——ヨハネは、まだ投獄されていなかったからである——」

(1) ヨハネの活動の場

- ①「サリムに近いアイノン」がどこか、明確ではない。
- ②ガリラヤ湖と死海の間のどこかである。
- ③恐らく、シェケムの東5キロメートルの辺りであろう。
- ④「そこには水が多かったからである」
 - *乾季になると、ヨルダン川の水は南に行くほど少なくなった。
 - *それでヨハネは、北に移動して、そこで活動した。
 - *ユダヤ的文脈では、浸礼が重要であることが分かる。

(2) 「人々は次々にやって来て、バプテスマを受けていた」

- ①短期間ではあるが、イエスとヨハネの働きがオーバーラップした。
- ②ユダヤからサマリヤにかけて、大いに賑わった。
 - *ともに弟子たちがいた。
 - *ともに群衆が取り囲んだ。
 - *ともに洗礼を受けた(イエスの場合は、弟子たちが)
 - *ともに、悔い改めと、神の国の到来を説いた。

(3) 「——ヨハネは、まだ投獄されていなかったからである——」

- ①ヨハネの投獄と斬首は、イエスの公生涯の転機となった。
- ②ヨハネは、共観福音書の情報を前提に書いている。
 - *マタ 14 : 1～12、マコ 6 : 14～29

3. 25 節

「それで、ヨハネの弟子たちが、あるユダヤ人ときよめについて論議した」(新改訳)

「ところがヨハネの弟子たちと、あるユダヤ人との間で、清めのことで論争が起こった」
(新共同訳)

(1) 論争の当事者

- ①ヨハネから洗礼を受け、ヨハネに付き従っている者たち
- ②ひとりのユダヤ人

(2) 論争の内容は、「清めのこと」である。

- ①具体的な内容は、分からない。
- ②エッセネ派の洗礼があった。
- ③パリサイ派の清めがあった(手足の清めから、器の清めまで)。
- ④この上、なぜヨハネの洗礼が必要か。
- ⑤もし必要だというなら、イエスの洗礼の方が、より価値があるのではないか。

4. 26 節

「彼らはヨハネのところに来て言った。『先生。見てください。ヨルダンの向こう岸であなたといっしょにいて、あなたが証言なさったあの方が、バプテスマを授けておられます。そして、みなあの方のほうへ行きます』」(新改訳)

「彼らはヨハネのもとに来て言った。『ラビ、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの方が、洗礼を授けています。みんながあの方の方へ行っています』」(新共同訳)

(1) 弟子たちは、ヨハネのために、嫉妬を感じた。

- ①イエスという名を意図的に避けている。
- ②ヨハネがイエスを認定したことを、柔らかく責めている。
- ③あの方の方が、人気が出ている。
- ④「みな」というのは、誇張法である。
- ⑤新共同訳では、「人」と「方」という言葉が使い分けられている。

(例話) カルビン主義とアルメニウス主義の論争

5. 27～28 節

「ヨハネは答えて言った。『人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることはできません。あなたがたこそ、「私はキリストではなく、その前に遣わされた者である」と私が言ったことの証人です』」

(1) ヨハネは、弟子たちが忘れてしまった真理を思い出させている。

- ①その人の奉仕の範囲は、神が決めておられる。

- ②ヨハネの奉仕は、メシアの先駆者としてのそれである。
*弟子たちは、その証しを何度も聞いていた。

6. 29 節

「花嫁を迎える者は花婿です。そこにおいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです」

- (1) ユダヤ的たとえが語られる。
 - ①自分は、花婿の友人である。
 - ②花婿が主役であり、自分は脇役である。
 - ③花婿の喜びは、私の喜びである。

7. 30 節

「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません」

- (1) すべては、神の計画通りに進んでいる。
 - ①この言葉は、すべての奉仕者への教訓である。
 - ②自分が衰えても、キリストの御名が称えられることを喜ぶ人は、義人である。

(例話) 「近代海外宣教の父」ウィリアム・ケアリ (1761-1834)

臨終の床で、「ウィリアム・ケアリについてではなく、『ウィリアム・ケアリの救い主』について語ってくれ」と言った。

II. 福音記者ヨハネの解説 (3 : 31~36)

1. バプテスマのヨハネの言葉でなく、福音記者ヨハネの言葉である。

- (1) キリスト論が展開されている。
 - ①十字架と復活後の視点である。
- (2) これまでの記事を基に、まとめの解説をしたものである。
 - ①ニコデモとの対話
 - ②バプテスマのヨハネの弟子たちの苦言

2. 31~33 節

「上から来る方は、すべてのものの上におられ、地から出る者は地に属し、地のことばを話す。天から来る方は、すべてのものの上におられる。この方は見たこと、また聞いたことをあかしされるが、だれもそのあかしを受け入れない。そのあかしを受け入れた者は、

神は真実であるということに確認の印を押したのである」

(1) 「上から来る方」と「地から出る者」の比較

- ①メシアは、天において見たこと、聞いたことを証しする。
- ②人間は、地に属し、地上のことしか理解できない。

(2) 2種類の間

- ①メシアのことばを信じない人
 - * 「だれも」とあるのは、誇張法である。
- ②メシアのことばを信じる人
 - * 「神は真実であるということに確認の印を押した」

(3) 1ヨハ5:10

「神の御子を信じる者は、このあかしを自分の心の中に持っています。神を信じない者は、神を偽り者とするのです。神が御子についてあかしされたことを信じないからです」

3. 34節

「神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである」

- (1) イエスは神から遣わされた方である。
 - ①ヨハネの福音書では、これが39回も出て来る。
- (2) イエスは神のことばを話される。
 - ①神が、聖霊を無限に与えられるからである。

(例話) 説教者のために、この聖句を用いて祈ることの誤り。

4. 35～36節

「父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった。御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる」

- (1) 父と子は、愛と信頼の関係で結ばれている。
 - ①父と子はひとつである。
 - ②万物は、父から御子の手へ渡されている。

(2) 御子に対する態度は、そのまま父に対する態度となる。

①御子を信じる者は、永遠のいのちを持つ。

②御子を信じない者は、神の怒りの中にある。

*神の怒りとは、罪や不義に対する怒りである。

Ⅲ. ユダヤからガリラヤへの移動(4:1~4)

1. 1~4節

「イエスがヨハネよりも弟子を多くつくって、バプテスマを授けていることがパリサイ人の耳に入った。それを主が知られたとき、——イエスご自身はバプテスマを授けておられたのではなく、弟子たちであったが——主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。しかし、サマリアを通って行かなければならなかった」

(1) パリサイ人との対決の時は、まだ来ていない。

①十字架の時は、3年後のことである。

(2) サマリアを通るのは、地理的要請ではない。

①それは、靈的要請のゆえである。

②イエスは、父の計画通りに行動しておられる。

2. ルカ3:19~20

「さて国主ヘロデは、その兄弟の妻ヘロデヤのことに、また、自分の行った悪事のすべてを、ヨハネに責められたので、ヨハネを牢に閉じ込め、すべての悪事にもう一つの悪事を加えた」

(1) ヘロデ大王の息子のヘロデ・アンテパス

①兄弟ピリポの妻ヘロデヤと結婚した。

②それを責めたヨハネは、逮捕され、投獄された。

3. マタ4:12

「ヨハネが捕らえられたと聞いてイエスは、ガリラヤへ立ちのかれた」

(1) これもまた、イエスの時を考慮した結果である。

結論:

1. 私たちに与えられている任務

(1) ヨハ3:27

「ヨハネは答えて言った。『人は、天から与えられるのでなければ、何も受けること

はできません』

(2) ヨハ3:34

「神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである」

(3) イエスの奉仕は無限であるが、私たちの奉仕には、限界がある。

①イエスに御霊が無限に与えられているのは、イザ11:1~2の成就である。

②私たち人間は、神の許しの範囲内でしか、活動することができない。

③旧約時代の預言者たちは、その時だけ、聖霊の影響を受けた。

④新約時代の信者には、それぞれに、異なった賜物が与えられている。

*1 コリ12:7~11 参照

(4) このことは、私たちに安心を与えてくれる。

①競争ではなく、補完こそが、信者同志の聖書的關係である。

2. ユダヤ式結婚のたとえの意味

(1) 花婿は、メシアである。

(2) バプテスマのヨハネは、自分を花婿の友人だと言った。

①花婿は、1名か2名の友人を任命する。

②友人の役割は、花婿と花嫁を結びつけることである。

③宴会の準備をする。

④初夜においては、部屋の外か天幕の外に立ち、花婿の声を待つ(29節)。

「花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている」(新共同訳)

*花婿から、結婚が完成したとの声がかかる。

*時には、血のついた白い布が友人に渡されることもある。

*友人は、その知らせを宴会場に持って生き、宴会がさらに盛り上がる。

⑤彼は、新約時代の教会の一員ではない。彼は、旧約時代に属している。

⑥教会は、使2章で誕生した。

(3) 花嫁は、教会である。

①2 コリ11:2

②エペ5:32

③黙19:6~8

「また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなものが、こう言うのを聞いた。『ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許され

2012年9月2日（日）、3日（月） 26回目 VI-033、034
最初の宮清め

た。その麻布とは、聖徒たちの正しい行いである』

「サマリヤの女との対話」 ヨハ4:4~26

1. はじめに

(1) ユダヤからガリラヤへの移動

- ①バプテスマのヨハネが逮捕されたから。
- ②パリサイ人たちとの衝突を避けるため。

(2) 4:3~4

「主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。しかし、サマリヤを通過して行かなければならなかった」

- ①地理的必然性ではない。
- ②霊的必然性である。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

スカルのヤコブの井戸にて (§35の前半)

(4) ユダヤ人とサマリヤ人の対立

- ①ユダヤ人とサマリヤ人の分裂の始まりは、王国の南北分裂である。
 - *北の10部族は、エルサレムに上らなくなった。
 - *ダンとベテルに神殿が建ち、金の子牛を礼拝した。
- ②前734年のアッシリヤの侵入以降、混血の民が誕生した。
 - *イスラエルの地に残ったユダヤ人と、移住してきた異邦人の結婚
 - *その結果、サマリヤ人と呼ばれる人種が誕生した。
- ③彼らは、アッシリヤ人がもたらした偶像を礼拝した。
 - *イスラエルの神も、その中に加えられた。
 - *後代になって、彼らはイスラエルの神だけを礼拝するようになった。
- ④礼拝の場としてエルサレムを否定し、ゲリジム山を強調した。
 - *ユダヤ人たちは、バビロン捕囚からの帰還後に、神殿を再建した。
 - *サマリヤ人たちは、その事業に参加させてもらえなかった(エズ4:1~2)。
 - *彼らは、ゲリジム山に自らの神殿を建設した。
- ⑤サマリヤ五書の存在
 - *彼らは、モーセの五書しか認めなかった。モーセを大いに崇拝した。
 - *預言書は拒否した。
 - *サマリヤ五書は、聖書本文としては正確性に欠ける。
 - *アブラハムがイサクを捧げた山をモリヤの山からゲリジム山に変更した。

⑥ユダヤ人は、人種的、宗教的理由によって、サマリヤ人を軽蔑した。

*ユダヤの格言「私の目が、サマリヤ人を見ることがないように」

⑦サマリヤ人も、ユダヤ人を軽蔑し、敵対した。

*ユダヤ人がエルサレムから下ることは許したが、上ることは許さなかった。

⑧現代もサマリヤ人の子孫たちが存在している(千名以下である)。

3. アウトライン

*非常に肉的、地上的なこの女に、真理を徐々に啓示していく。

- (1) 新しい命の啓示(4:5~14)
- (2) この婦人の本質の啓示(4:15~19)
- (3) 真の礼拝の啓示(4:20~24)
- (4) ご自身のメシア性の啓示(4:25~26)

4. メッセージのゴール

- (1) ニコデモとサマリヤの女の対比
- (2) 礼拝の本質

このメッセージは、新しい命と、礼拝の本質について、学ぼうとするものである。

I. 新しい命の啓示(4:5~14)

1. 対話の状況設定(5~6節)

「それで主は、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近いスカルというサマリヤの町に来られた。そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。時は第六時ごろであった」

(1) エルサレムからガリラヤに向かう途中、サマリヤの町に来られた。

①ユダヤ人がこの方向に向かうことは、サマリヤ人は容認した。

②町の名は、スカルである。シェケム(現代のナブルス)の東にある。

③ここはヨセフ族の所有地となった(ヨシ24:32)。

(2) ヤコブの井戸の存在

①旧約聖書には、この記述はない。

②伝承として、ヤコブがこの井戸を掘ったとされている。

③今も、この井戸だと思われるものが存在している。深さは30メートルほど。

(3) 「イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた」

①人間イエスの姿がここにある。

*初めての聖地訪問での体験

②しかし、イエスは常に働いておられた(ヨハ5:17)。

「イエスは彼らに答えられた。『わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです』」

③受肉の神秘がここにある。

(4)「時は第六時ごろであった」

①ユダヤ式なら、正午ごろとなる(午前6時から数えはじめる)。

②ローマ式なら、午後6時ごろとなる(午前0時か、午後0時から)。

③後者であろう。誰も井戸に水汲みに来ない時間である。

2. イエスの語りかけ(7~8節)

「ひとりのサマリヤの女が水をくみに来た。イエスは『わたしに水を飲ませてください』と言われた。弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた」

(1) この時間に水を汲みに来るのは、人目を避けている証拠である。

(2) イエスは、常識を破っている。

①公の場で、男性が女性に語りかけることはなかった。

②ユダヤ人がサマリヤ人に語りかけることはなかった。

(3)「弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた」

①ユダヤ人がサマリヤ人に何かを頼んだ時は、代価を支払った。

②弟子たちも、食物のために代価を支払った。

③しかしイエスは、水を求めることによって、自らを負債者の立場に置いた。

④これは、3番目の常識破りである。

(4) イエスは、当時の人種的、宗教的、社会的壁を壊して、この女に語りかけた。

①ユダヤ人のラビなら、渴きを我慢して、そのままやり過ごしたはずである。

3. サマリヤの女の応答(9節)

「そこで、そのサマリヤの女は言った。『あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。』——ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである——」

(1) この女の驚きの背後には、ユダヤ人とサマリヤ人の人種対立の長い歴史がある。

①他人ではなく、半分兄弟であるがゆえに、さらに憎悪が高まる。

(2)「ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである」

①ヨハネによる解説文である。

②「つきあい」(新改訳)、「交際」(新共同訳)と(口語訳)、「交り」(文語訳)

③ギリシア語は、「スンクロマイ」である。

*同じものを共有しない。

*ユダヤ人がサマリヤ人の使用した器を使うことはない。

④ユダヤ人の男がサマリヤ人の女の器で水を飲もうとしている点に驚きがある。

*ラビ法(紀元66年)は、サマリヤ人の女は常に出血があり、汚れていると見なすと宣言した。

4. 新しいいのちの啓示(10節)

「イエスは答えて言われた。『もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう』」

(1)「生ける水」

①ユダヤ的文脈では、動いている水である。「マイム・ハイム」

*泉、川、海などの水

*貯水槽の水ではない。

②イエスは、聖霊のことに言及している。

(2) 女の心に湧いた疑問

①この人は誰か。

②神の賜物とは何か。

③生ける水とは何か。

5. 興味を示す応答(11~12節)

「彼女は言った。『先生。あなたはくむ物を持っておいでにならず、この井戸は深いのです。その生ける水をどこから手にお入れになるのですか。あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を与え、彼自身も、彼の子たちも家畜も、この井戸から飲んだのです』」

(1) 認識の進展

①「あなたはユダヤ人」

*軽蔑の言葉

②「先生」(新改訳)

- *キュリオス(キュリエという呼びかけ)
- *「主よ」(新共同訳)、(口語訳)、(文語訳)
- *英語の「Sir」である。

(2) 疑いの心

- ①水を汲む道具がない。
- ②井戸は深い。パレスチナで最も深い井戸のひとつである。
- ③先祖のヤコブよりも偉いのか。
 - *サマリヤ人が「私たちの父ヤコブ」と言っているのは、興味深い。
 - *否定形の答えを想定した疑問文である。ギリシア語の「メイ」。
- ④もしヤコブよりも偉くないとしたら、どうしてヤコブが与えた水よりも優れた水を与えられるというのか。

(3) 女の意識は、水に集中している。

- ①地上的な関心しかない。
- ②霊的な世界に対して盲目である。

6. 霊的真理の啓示(13~14節)

「イエスは答えて言われた。『この水を飲む者はだれでも、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます』」

(1) 水と生ける水の対比

- ①この水を飲んでも、また渴く。
- ②イエスが与える水を飲むなら、渴くことがない。
 - *その水は、心の中で泉となり、永遠のいのちの実質を体験させる。

(2) 自然界の水と聖霊の働きの対比である。

- ①イエスは、この女から水を受けていない。
- ②女の霊的必要性を満たすために、自らの肉体的必要性を忘れている。

7. 心を開く応答(15節)

「女はイエスに言った。『先生。私が渴くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい』」

- (1) いまだに、「先生」(Sir)という認識の枠を超えていない。

- ①イエスが提供する水とパイプラインでつながるなら、水汲みから解放される。
- (2) 罪人の認識は、徐々にしか進展しない。
 - ①「永遠のいのちへの水」という言葉を聞き逃している。

II. この婦人の本質の啓示 (4 : 15~19)

1. 女の罪の指摘 (15~18 節)

- (1) この女には、5人の夫がいたが、今は夫でない男と住んでいる。
 - ①確かに、この女も霊的に渇いている。
 - ②イエスは、人の心のうちにあるものを知っておられた(ヨハ2:24~25)。
- (例話) アルコール、芸術、人間関係の愛など

2. 神学的議論への転換 (19 節)

「女は言った。『先生。あなたは預言者だと思います』」

- (1) 「先生」から「預言者」への意識変更がある。
 - ①サマリヤ人の神学では、モーセの次に登場する預言者は、メシアである。
 - ②彼女は、イエスがメシアであることを認識し始めている。
 - ③対話の最後には、イエスがメシアであることを信じるようになる。

- (2) 人は、自分の罪を指摘されると、神学的議論を展開し始める。

III. 真の礼拝の啓示 (4 : 20~24)

1. 神学論争 (20 節)

「私たちの父祖たちはこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます」

- (1) 彼女は、ユダヤ人とサマリヤ人の対立の中心点を質問した。
 - ①礼拝の場所は、どこかという質問である。
 - ②サマリヤ人は、ゲリジム山だと言う。
 - ③ユダヤ人は、エルサレムだと言う。

2. 新しい時代の到来 (21~22 節)

「イエスは彼女に言われた。『わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。救いはユダヤ人か

ら出るのですから、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝
しています』

(1) 新しい時代の到来

- ①モーセの律法の教えでは、礼拝の場所はゲリジム山ではなくエルサレムである。
- ②しかし、場所は問題ではなくなる時が来る。

(2) 「救いはユダヤ人から出る」

- ①救いは、ユダヤ人を通して与えられる。
- ②エルサレムが礼拝の場である。
- ③メシアはユダヤ人から出る。

(3) 「わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝していま
す」(新改訳)

「あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを
礼拝している」(新共同訳)

- ①サマリヤ人は、礼拝している神を知らない。
- ②ユダヤ人の礼拝は不完全であったが、それでも、ユダヤ人の神を礼拝していた。

3. 真の礼拝の啓示 (23～24 節)

「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時で
す。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を
礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません」

(1) イエスは、父なる神を解説された。

- ①神は霊である。
- ②物理的実体はない。
 - *神は光である。
 - *神は愛である。
 - *神の本質を3文字で啓示した。
 - * (God is spirit.) (ニューマ・ホ・セオス)

(2) それゆえ、「礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません」。

- ①すべての偶像礼拝の否定である。
- ②神を神と認める心の在り方。新生した人にのみ可能。
- ③態度や口先だけでなく、真実な心で。

IV. ご自身のメシア性の啓示 (4:25~26)

1. 女の信仰に関する知識 (25節)

「女はイエスに言った。『私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう』」

(1) サマリヤ人もまた、ユダヤ人同様に、メシア信仰を持っていた。

①メシアの到来を長年にわたって期待していた。

(2) メシアが到来したなら、すべての宗教的混乱は収まる。

①夫のことや、礼拝の場所などは、今論じても意味がない。

②女は、この会話を終わらせようとしている。

2. イエスの自己啓示 (26節)

「イエスは言われた。『あなたと話しているこのわたしがそれです』」(新改訳)

「イエスは言われた。『それは、あなたと話をしているこのわたしである』」(新共同訳)

「Jesus said to her, "I who speak to you am he."」(RSV)

(1) 女には、この宣言を受け取る用意はできていなかった。

(2) 「I am」という言葉の深遠さを見よ。

①通常は、「I am ○○.」となる。

②ここでは、絶対的な「I am.」である。

③そういう意味では、「あなたと話しているこのわたしである」と訳すべきだろう。

(3) それゆえ、イエスが語っていることに、女は興味を示すべきである。

結論：

1. ニコデモとサマリヤの女の対比

(1) いくつかの特徴

①エルサレム、サマリヤ

②ユダヤ人であった、サマリヤ人であった

③男であった、女であった

④求めていた、無関心であった

⑤尊敬されていた、社会の落ちこぼれであった

⑥道徳的であった、不道徳であった

⑦学問があった、無学であった

(2) 教訓

- ①あらゆるタイプの人が、イエスを必要としている。
- ②2人に共通しているのは、地上の世界や発想を抜け出していないこと。
- ③イエスは、あらゆる人種的、社会的、宗教的壁を壊される。

2. 礼拝の本質

「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです」(23節)

(1) ヨハネの福音書では、「時」(ホーラ)は重要な神学用語である。

①イエスの十字架と復活の先にある「時」である。

(2) この「時」は、新約時代のことである。

- ①今私たちは、その時代に生かされている。
- ②建物は必要であるが、建物志向のキリスト教には危険性がある。
- ③霊とまことによる礼拝を求めようではないか。

(3) 終末論的には、エルサレムは再び重要性を帯びる。

「サマリヤの女との対話 (2)」 ヨハ4:27~42

1. はじめに

(1) ユダヤからガリラヤへの移動

- ①サマリヤを通る霊的必然性があった。
- ②井戸のそばでサマリヤの女と対話した。
- ③彼女に、「I am.」と宣言された。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

スカルのヤコブの井戸にて (§35の後半)

(3) ユダヤ人とサマリヤ人の対立

- ①人種的壁
- ②宗教的壁

2. アウトライン

*ヨハネは、非常に優れた語り部である。

- (1) この女の証し (4:27~30)
- (2) 弟子たちに対する教え (4:31~38)
- (3) サマリヤ人たちの応答 (4:39~42)

3. メッセージのゴール

- (1) 第2の糧
- (2) 伝道の原則

このメッセージは、キリストの弟子としての道を学ぼうとするものである。

I. この女の証し (4:27~30)

1. 弟子たちの帰還 (27節)

「このとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話しておられるのを不思議に思った。しかし、だれも、『何を求めておられるのですか』とも、『なぜ彼女と話しておられるのですか』とも言わなかった」

- (1) 弟子たちは、町へ買い物に出かけていた。
 - ①コシエルの食物を探す。
 - ②代金は支払う。

③それを持って、イエスのもとに帰って来た。

(2) 彼らは、あり得ない光景を目撃した。

「ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた」(新共同訳)

「時に弟子たち歸りきたりて、女と語り給ふを怪しみたれど、」(文語訳)

①3 ストライクの状態

*イエスが、公の場で女と話している。

*しかも、この女はサマリヤ人である。

*さらに、いかがわしい風体の女である。

②ラビたちは、公の場での妻との対話さえ疑問視した。

③ラビたちは、スキャンダルになりかねない状況を、なんとしても避けた。

(3) 弟子たちは、気にはなったが、沈黙した。

①イエスを諷めることはしなかった。

②イエスに質問することも控えた。

③イエスに対する信頼の表れ。

*私たちが、分からなくても信頼する必要がある。

2. その場を離れる女 (28 節)

「女は、自分の水がめを置いて町へ行き、人々に言った」

(1) その場を離れた理由

①イエスに、自分の過去を言い当てられたため、大いに驚いた。

②弟子たちが帰って来たので、2人だけの対話が難しくなった。

(2) 「女は、自分の水がめを置いて町へ行き」

①目撃者情報のおいがある。

②水汲みよりも、自分が出会った人を紹介することに関心が移った。

③これは、非常に象徴的な言葉だという印象がある。

*彼女が負ってきた重荷

*彼女の過去

*それを、イエスの足元に置いて帰って行った。

3. 町に帰って証しする女 (29 節)

「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言った人がいるのです。この方がキリス

トなのでしょうか」

(1) 女の証言

- ① イエスは、彼女の人生における主要な出来事を言い当てた。
- ② 「私のしたこと全部を私に言った」とは、そういう意味である。
- ③ それを聞いた人々の中には、彼女と関係した男たちもいたであろう。
- ④ 「来て、見てください」は、ヨハネの福音書では重要な言葉である (1 : 46)。

(2) 女の疑問

- ① 「この方がキリストなのでしょうか」とは、女の心の揺れを表現した言葉。
- ② これは、「NO」という答えを予想した、結論を保留する質問である。
- ③ 女は、まだ信仰と疑いの間を揺れ動いている。
- ④ 求道者が、最高の宣教師になることがある。

4. 応答する町の人々 (30 節)

「そこで、彼らは町を出て、イエスのほうへやって来た」

- ① 人々は、自分の目と耳で確かめるために、イエスのほうにやって来た。
- ② この時点から、女の姿は消える。
- ③ 最終的には、この女も信仰を告白する人々の中に含まれるようになる。

II. 弟子たちに対する教え (4 : 31~38)

1. 食物を差し出す弟子たち (31~32 節)

「そのころ、弟子たちはイエスに、『先生、召し上がってください』とお願いした。しかし、イエスは彼らに言われた。『わたしには、あなたがたの知らない食物があります』」

(1) イエスの姿は変化していた。

- ① イエスは、疲れ切っていた。
- ② 空腹と渇きで苦しんでいた。
- ③ しかし、今は見違えるほど元気になっている。
- ④ 弟子たちは、イエスに食物を勧めた。

(2) イエスの答えは、謎めいていた。

「わたしには、あなたがたの知らない食物があります」

- ① ここでイエスは、霊的糧について語っている。

2. 当惑する弟子たち (33~34 節)

「そこで、弟子たちは互いに言った。『だれか食べる物を持って来たのだろうか』。イエスは彼らに言われた。『わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です』」

(1) 弟子たちは、肉体の糧について論じている。

①苦勞して食物を買ってきた。

②遅すぎたので、誰か別の人が食物を持って来たのだろうか。

(2) イエスは、靈的糧について解説する。

①イエスの使命は、自分を派遣された父なる神の御心を実行すること。

*これは、ヨハネの福音書の最初からのテーマである。

②父なる神の御心を実行することは、靈的力となる。

*サマリヤの女に伝道したことは、イエスにとっては喜びであった。

(例話) アンケートのコメント：疲れていたが、礼拝に出て、元気になった。

3. 収穫時期に関する格言 (35 節)

「あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある』とってはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています」

(1) この地方の格言

①麦の種を蒔いて発芽してから、収穫までに4か月ある。

②これは、自然界の収穫のことである。

③知っていることから、知らないことへと導く(靈的収穫のこと)。

(2) 「目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています」

①靈的世界の収穫は、別の原理で動いている。

②「色づいて」(新改訳)、(新共同訳)、(口語訳)、「黄ばみて」(文語訳)

③ギリシア語は「リユーコス」(白)である。

④緑色が、薄い白や黄色に変わると、収穫の時となる。

⑤イエスは、サマリヤ人たちが大勢、こちらに向かってくるのを見たのであろう。

4. 蒔く者と刈る者に関する格言 (36~38 節)

「すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに入れられる実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。こういうわけで、『ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る』ということわざは、ほんとうなのです。わたしは、あなたがたに自分で勞苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました。ほかの人々が勞苦して、

あなたがたはその労苦の実を得ているのです」

(1) 神の国の原則

- ① イエスが登場して以降、常に収穫の時である。
- ② 刈る者と蒔く者が、ともに喜ぶ。

(2) 「わたしは、あなたがたに自分で労苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました」

- ① イエスは、預言的に語っている。
- ② イエスは、十字架と復活後の視点を持っておられた。

Ⅲ. サマリヤ人たちの応答 (4 : 39~42)

1. 証しによって導かれた信仰 (39~40 節)

「さて、その町のサマリヤ人のうち多くの者が、『あの方は、私がしたこと全部を私に言った』と証言したその女のことばによってイエスを信じた。そこで、サマリヤ人たちはイエスのところに来たとき、自分たちのところに滞在してくださるよう願った。そこでイエスは二日間そこに滞在された」

(1) 最初は、女の証しによって、イエスがメシアであることを信じた。

- ① サマリヤ人たちは、メシアを待ち望む信仰を持っていた。

(2) イエスはサマリヤ人たちの要請に応じて、そこに2日間滞在した。

- ① 「メノウ」(留まる) という動詞が、2回使用されている。
- ② 1 : 39 で、弟子たちはイエスのもとに留まったとあった。
- ③ イエスは、ユダヤ教の「清め・汚れ」の教えを完全に無視された。
- ④ イエスはサマリヤ人の町に留まり、人々はイエスに留まった。

2. サマリヤでの霊的覚醒 (41~42 節)

「そして、さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。そして彼らはその女に言った、『もう私たちは、あなたが話したことによって信じているではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです』」

(1) 信仰の進展が見られる。

- ① 女の証しによって信じた。
- ② イエスのことば(ロゴス、単数形)によって信じた。

(2) 「この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです」

①「世の救い主」という表現は、福音書の中ではここだけに登場する。

②イスラエルはメシアを拒否する方向に進む(1:11)。

③サマリヤ人は、信仰に導かれる。

*彼らは、最早軽蔑された民、二級市民ではなくなった。

(3) サマリヤの女の箇所は、大きな文脈の中で読む必要がある。

①使1:8

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」

②イエスのここまでの動き

*エルサレム→ユダヤ→サマリヤ→ガリラヤ(遠隔地)

③イエスは弟子たちに、福音宣教の普遍性について教えようとされた。

④礼拝の改革の予感はずでにあった。

*宮清めと3日目の復活

*礼拝する場所は、問題ではなくなる。

結論:

1. 第2の糧

(1) ヨハ4:34

「イエスは彼らに言われた。『わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です』」

(2) 申8:3

「それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は【主】の口から出るすべてのもので生きる、ということ、あなたにわからせるためであった」

(3) 現代人の特徴

①物の世界だけが現実であるという認識

②目に見えない世界(心の世界)の軽視

(4) 第2の糧の原則

- ①第1の糧の否定や軽視ではない。
- ②第2の糧には優先性がある。
- ③一時的なものと、永続性のあるものの対比である。

2. 伝道の原則

(1) 「ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る」という格言について

- ①これは成就するが、本来の意味では、蒔く者と刈る者の運命は正反対である。

(2) 聖句

①レビ 26 : 16

「わたしもまた、あなたがたに次のことを行おう。すなわち、わたしはあなたがたの上に恐怖を臨ませ、肺病と熱病で目を衰えさせ、心をすり減らさせる。あなたがたは、種を蒔いてもむだになる。あなたがたの敵がそれを食べる」

②申 28 : 30

「あなたが女の人と婚約しても、他の男が彼女と寝る。家を建てても、その中に住むことができない。ぶどう畑を作っても、その収穫をすることができない」

③ヨブ 31 : 8

「私が種を蒔いて他の人が食べるがよい。私の作物は根こぎにされるがよい」

(3) 収穫の時は、喜びの時である。

①ルツ 3 章

②イザ 9 : 3

③霊的収穫の喜び。ルカ 15 : 7

「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです」

- ④蒔く者は、その喜びに参加できない。

(4) 新約時代の原則

①蒔く者

*旧約聖書の預言者たち

*特に、バプテスマのヨハネ

②刈る者

*イエスの弟子たち

*バプテスマのヨハネは、ペンテコステの祝福の前に死んだ。

- ③蒔く者も、刈る者も、ともに喜ぶ。

*ともに報酬に与る。

④福音宣教の普遍性に着目する必要がある。

⑤クリスチャンは、互いに宣教のパートナーである。

*蒔く者は、刈る者に対して妬みを覚えてはならない。

*刈る者は、蒔く者に対して優越感を覚えてはならない。

「ガリラヤ伝道」

§ 036 ヨハ4:43~45

§ 037 マコ1:14~15

1. はじめに

(1) サマリヤ伝道

- ①ひとりの女から伝道が始まり、多く者が救われた。
- ②このリバイバルは、伝道者ピリポの伝道につながる(使8章)。
- ③イエスは、ガリラヤに向かう。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

イエスのガリラヤ到着 (§ 36)

ガリラヤ伝道の概略 (§ 37)

(3) イエスの公生涯の大きな区切り

- ①これまでは、公生涯初期の活動を見てきた。
- ②これからは、ガリラヤ伝道を見ていく。
 - *英語で、「The Great Galilean Ministry」という。
 - *約1年半続く。

2. アウトライン

(1) イエスのガリラヤ到着(ヨハ4:43~45)

(2) ガリラヤ伝道の概略

- ①マコ1:14~15
- ②マタ4:17
- ③ルカ4:14~15

3. メッセージのゴール

(1) 福音とは何か。

このメッセージは、ガリラヤ伝道の始まりについて学ぼうとするものである。

I. イエスのガリラヤ到着(ヨハ4:43~45)

1. 43~44節

「さて、二日の後、イエスはここを去って、ガリラヤへ行かれた。イエスご自身が、『預

言者は自分の故郷では尊ばれない』と証言しておられたからである」

(1) サマリヤの町に二日滞在し、それからガリラヤに行かれた。

①ユダヤを発った時の計画通りである。

(2) イエスがよく口にされた格言

「預言者は自分の故郷では尊ばれない」

①共観福音書に、この格言がより詳細に出て来る。

②次の45節とのつながりが、難解である。

*「そういうわけで、」

(3) 3つの解釈

①「**自分の故郷**」とはユダヤのことである。歓迎されないので、ユダヤを去った。

*しかし、ユダヤがイエスの故郷という情報は、ヨハネの福音書にはない。

*ベツレヘムで誕生したという情報もない。

②格言はその通りであるが、実際は、よい結果が出た。

「イエスは常々、『預言者は、故郷では尊敬されないものです』と言っておられました。ところが、どうでしょう。ガリラヤの人たちは、大喜びでイエスを迎えたのです」(リビングバイブル、44～45節a)

③「**自分の故郷**」とは、ナザレのことである。

*マタイとマルコでは、そうなっている。

*イエスはナザレを避けて、ガリラヤの別の場所に行かれた。

*恐らくカナに直行されたと思われる。カナ・サイクルが明らかに存在する。

*ナザレでの拒否は、ルカが記録している。

2. 45節

「そういうわけで、イエスがガリラヤに行かれたとき、ガリラヤ人はイエスを歓迎した。彼らも祭りに行っていたので、イエスが祭りの間にエルサレムでなされたすべてのことを見ていたからである」(45節)

(1) ガリラヤ人は、イエスを歓迎した。

①まだ、完全な信仰にはなっていない。

②イエスを、神からの使者として受け入れた。

(2) その理由は、イエスの活動を目撃していたから。

①彼らもまた、過越の祭りを祝うために、エルサレムに上っていた。

②そこで、イエスがなされたすべてのことを見ていた。

*宮清め

*しるし

3. ここまでのイエスの自己啓示

(1) 最初の弟子たちは、イエスがメシアであると認識した。

①イエスはそれを否定しなかった。

(2) サマリヤの女に、自分がメシアであることを啓示された。

①サマリヤの町にリバイバルが起こった。

(3) しかし、エルサレムの宗教的指導者たちには、まだ啓示していない。

①宮清めはメシア宣言であるが、神殿と礼拝に関する情熱がその背景にある。

②まだ啓示していない理由は、彼らとの対決を避けるためである。

③「十字架の時」が来る前に、民を教え、弟子たちを訓練する必要があった。

4. ガリラヤ伝道は、好意的な雰囲気の中で始まった。

(1) ガリラヤ人の信仰は不完全であったが、イエスはそれを受け入れた。

①それ以下の状態から始まったのが、ザアカイの救いである(ルカ19:3~10)。

(2) イエスは、どんな小さな信仰でも受け入れてくださる。

II. ガリラヤ伝道の概略

1. はじめに

(1) 注目すべき3つの流れ(進展)

①イエスの自己啓示の進展

②弟子訓練の進展(自分がいなくなった後、働きを継続する人々)

③エルサレムの宗教的指導者たちとの対立の進展

(2) 当時のガリラヤ地方

①ガリラヤ湖周辺には、コスモポリタンの雰囲気があった。

②ヴィア・マリスという通商路が、ガリラヤ湖の西岸を南北に走っていた。

③軍隊、商人、外交官などが行き来した。

④ユダヤ人、シリア人、ローマ人、パルテヤ人(使2:9)などが住んでいた。

⑤ヘブル語、アラム語、ギリシア語などが話されていた。

⑥イエスの伝道は、この現実の中で始められた。

2. マコ1:14~15

「ヨハネが捕らえられて後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べて言われた。『時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい』」

(1) バプテスマのヨハネの逮捕は、イエスの公生涯の転機となった。

①それは、イエスの働きの時が来たことを意味している。

(2) 「神の福音を宣べて言われた」

①神が与えてくださった福音という意味である。

②「福音」とは、良き知らせ(グッド・ニュース)のことである。

③バプテスマのヨハネが伝えたメッセージと同じである。

(3) 「福音の内容」

①2つの宣言

* 「時が満ち」。メシアが到来する時が来た。

* 「神の国は近くなった」。

②2つの命令

* 「悔い改めて」。認識を変える。信頼を置く対象を変える。

* 「福音を信じなさい」。イエスをメシアとして受け入れる。

* 悔い改めと信じることは、同時に起こる。

3. ルカ4:14~15

「イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた。すると、その評判が回り一帯に、くまなく広まった。イエスは、彼らの会堂で教え、みなの人にあがめられた」

(1) イエスの役割

①教師

②ラビ

③預言者

(2) イエスの伝道の特徴

①御霊の力

②会堂から会堂へと巡回された。

③有名になり、みなの人に尊敬された。

④次回に見るが、ナザレでは尊敬されなかった。

結論：福音とは何か。

1. はじめに

- (1) ギリシア語で「ユーアングリオン」である。
- (2) 「グッド・ニュース」、「グッド・メッセージ」のことである。
- (3) ここでイエスが伝えた「福音」と、私たちが信じている「福音」は同じか。

2. イエスが伝えた「福音」

(1) 漸進的啓示

- ①十字架以前のことなので、私たちが信じている福音と同じではない。
- ②話し手と聞き手の間に、どういう共通認識があったかを常に考慮する。

3. 「神の国」(Kingdom of God)

- (1) 「天の御国」(Kingdom of Heaven)と同じ意味である。

①マタイは、「天の御国」を使う。

- (2) 基本的には、神の支配という意味である。

- (3) イエスは、「神の国」について詳しく説明する必要はなかった。

- ①当時のユダヤ人たちは、長い間、神の国の到来を待ち望んでいた。
- ②この期待は、メシア待望と密接に結びついていた。
- ③ここでの「神の国」とは、メシア的王国のことである。

4. メシア的王国に関する預言

- (1) これが旧約聖書の預言のピークである。

①2サム7：8～17

②イザ11：1～9、24：23

③エレ23：4～6

④ミカ4：6～7

⑤ゼカ9：9～10、14：9

- (2) 2サム7：8～17は、ダビデ契約の箇所である。

「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅

く立てる。…あなたの家とあなたの王国とは、わたしの前にとこしえまでも続き、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ」(2サム7:12~16)

- ①ある部分は、ソロモンへの預言である。
- ②永遠の王座の部分は、メシア的王国の預言である。

5. イエスが伝えた福音とは。

- (1) 時が満ち、メシアが到来した。
- (2) 考え方を換え、そのメシアを受け入れよ。
- (3) そうすれば、旧約聖書の預言者たちが預言してきたメシア的王国は成就する。
- (4) しかし、彼らがイエスを拒否したため、この預言は未だに成就していない。

6. 私たちが信じる福音は、1コリ15:1~4に記されている。

「兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私あなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたを受け入れ、また、それによって立っている福音です。また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。私あなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、」

- (1) キリストは、私たちの罪のために死なれた。
- (2) キリストは、葬られた。
- (3) キリストは、三日目によみがえられた。

7. では、旧約聖書が約束しているメシア的王国の成就是、どうなったのか。

- (1) イエスの死、復活、昇天によって、聖霊が下る時代になった。
- (2) ペンテコステの日に、教会が誕生した。
 - ①ユダヤ人信者と、異邦人信者が新しいひとりの人を形成する。
 - ②この真理は、旧約聖書では預言されていなかった。
- (3) 教会時代は、救われる異邦人の数が満ちる時まで続く。
 - ①その間、ユダヤ人も個人的には救われ続ける。
 - ②異邦人の数が満ちると、教会は携挙される。
- (4) 大患難時代を通して、ユダヤ人は民族的救いを体験するようになる。
 - ①ロマ9~11章に預言されている。
- (5) ユダヤ人の祈りに答えて、メシアが再臨される。
- (6) その時、メシア的王国の預言は成就する。

8. 聖書は、ユダヤ人の書か。

(1) Yes. 神はユダヤ人を選び、人類救済計画を実行しようとされた。

(2) No. 救いの計画は、最初から全人類に向けられたものである。

①神は、ユダヤ人がメシアを拒否した結果、異邦人に救いが伝わることを知っておられた。

②サマリヤの町でのリバイバルは、福音が人種的壁を乗り越えることの象徴である。

(3) 讚美歌 529 番 (Blessed Assurance)

ああうれし、我が身も 主のものとなりけり

浮世だにさながら 天つ世の心地す

Chorus:

This is my story, this is my song,

Praising my Saviour all the day long;

This is my story, this is my song,

Praising my Saviour all the day long.

「王室の役人の息子の癒し」

§ 038 ヨハ4:46~54

1. はじめに

(1) 前回の箇所から、ガリラヤ伝道が始まった。

- ①英語で、「The Great Galilean Ministry」という。
- ②約1年半続く。

(2) イエスは再びカナに行かれた。

- ①カナでの奇跡は、「最初のしるし」(ヨハ2:11)。
- ②弟子たちは、イエスを信じた。
- ③この箇所で、カナに戻っている。
- ④カナから始まりカナで終わるというカナ・サイクルが見える。
- ⑤カナ・サイクルの最初と最後に、「しるし」が記録されている。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

カナにおける役人の息子の癒し (§ 38)

2. アウトライン (2つの「しるし」の対比)

- (1) 必要の発生
- (2) イエスへの願い
- (3) 叱責のことば
- (4) 叱責のことばへの応答
- (5) 信仰による応答
- (6) 奇跡的結果
- (7) 結論

3. メッセージのゴール

- (1) 信仰の成長

このメッセージは、信仰の成長について学ぼうとするものである。

I. 必要の発生 (46節)

「イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、かつて水をぶどう酒にされた所である。さて、カペナウムに病気の息子がいる王室の役人がいた」

1. ガリラヤのカナとカペナウムの位置関係

(1) カナは山地の村。カペナウムは湖畔の町。

①距離的には、約30キロ離れていた。

②高度差は、約600メートルあった。

2. 王室の役人

(1) ヘロデ・アンテパスの王室の役人である。

①この人はユダヤ人であろう(後に出て来るイエスのことばからの類推)。

②宮廷の高官である。

*軍事担当か。

*徴税担当か。

(2) 彼は、カペナウムに住んでいた。

3. 2つの「しるし」の対比

(1) 婚礼で、ぶどう酒がなくなった。

①花婿とその父にとっては、屈辱的な状況である。

(2) 息子が瀕死の状態にあった。

①地位も、財産も、経験も、なんの役にも立たない状態がやってきた。

②人生に起こるこのような困難は、私たちがキリストに近づける。

II. イエスへの願い(47節)

「この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところへ行き、下つて来て息子をいやしてくださるよう願った。息子が死にかかっていたからである」

1. この人が行動を起こした理由

(1) イエスが、ユダヤで行った「しるし」について情報を得ていたのであろう。

①最初の「しるし」についても、知っていた可能性が大である。

②イエスに対して、期待を抱いた。

2. 2つの「しるし」の対比

(1) 母マリアが、イエスに助けを求めた。

①公の場で、私的關係を持ち出した。

(2) 王室の役人が、イエスに助けを求めた。

①「下って来て息子をいやして下さるように願った」

*カナからカペナウムまでは、下りの地形になっている。

②「息子が死にかかっていたからである」

*息子に対する父の愛が、彼を行動に駆り立てた。

*彼は、自らイエスのもとにやって来た。

*貧しい者も、富める者も、すべて、自らイエスのもとに来る必要がある。

*イエスのもとに来ることには、犠牲が伴う。

③彼はある種の信仰を持っていたが、それは不完全な信仰であった。

*イエスがそこにいないと、癒しは起こらないと考えていた。

*当時は、癒す人がそこにいないと、癒しは起こらないと考えられていた。

Ⅲ. 叱責のことば (48 節)

「そこで、イエスは彼に言われた。『あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない』」

1. この役人が、ユダヤ人であることが分かる。

(1) ユダヤ人は、しるしと不思議を求める。

「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します」(1 コリ 1:22)

2. 2つの「しるし」の対比

(1) マリアに対する叱責

「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません」(2:4)

(2) 役人に対する叱責

①叱責の要素もあるが、それよりも、挑戦に満ちた問いかけである。

②「しるし」を見なくても、息子は癒されると信じる信仰はあるか、ということ。

Ⅳ. 叱責のことばへの応答 (49 節)

「その王室の役人はイエスに言った。『主よ。どうか私の子どもが死なないうちに下って来てください』」

1. 2つの「しるし」の対比では、この段階だけが、少し異なる。

(1) マリアの場合は、すぐにイエスのことばを受容した。

①使いの者たちに、イエスの言うことに従うように命じた。

- (2) 王室の役人の場合は、受容するのに多少の時間がかかった。
 - ①彼には、信仰に関する神学的議論をする余裕はなかった。
 - ②息子が死にかかっている。
 - ③ただ、恵みにすぎる以外に方法はない。

V. 信仰による応答 (50 節)

「イエスは彼に言われた。『帰って行きなさい。あなたの息子は直っています』。その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた」

1. 最初の「しるし」

- (1) イエスは、使いの者たちに命じた。
 - ①「水がめに水を満たしなさい」
 - ②「さあ、今くみなさい。そして宴会の世話役のところを持って行きなさい」
- (2) 使いの者たちは従った。
 - ①「彼らは水がめを縁までいっぱいにした」
 - ②「彼らは持って行った」

2. 第2の「しるし」

- (1) イエスは、王室の役人に命じた。
 - ①命令：「帰って行きなさい」
 - ②保証：「あなたの息子は直っています」
 - ③これは、大いなる信仰の挑戦である。
 - ④距離的に離れていても、癒しは起こるのか。
- (2) 王室の役人は従った。
 - ①「イエスが言われたことばを信じて、」
 - ②「帰途についた」

VI. 奇跡的結果 (51～53 節 a)

1. 最初の「しるし」

- (1) 水がぶどう酒に変わった。
 - ①宴会の世話役は、驚いた。

2. 第2の「しるし」

「彼が下って行く途中、そのしもべたちが彼に出会って、彼の息子が直ったことを告げた。」

そこで子どもがよくなった時刻を彼らに尋ねると、『きのう、第七時に熱がひきました』
と言った。それで父親は、イエスが『あなたの息子は直っている』と言われた時刻と同じ
であることを知った」

- (1) 恐らく彼は、カナに一泊したのであろう。
 - ①彼の信仰を示している。
 - ②下って行く途中、上って来るしもべたちに出会った。

- (2) 息子が癒されたことを知る。
 - ①時刻を尋ねると、夜7時に熱が引いたという。
 - *ユダヤ式時間なら、午後1時である。
 - *ローマ式時間なら、午後7時である。
 - ②彼は、距離的隔たりは、イエスにとって問題でないことを知った。

VII. 結論 (53b～54節)

1. 最初の「しるし」

「イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた」(2:11)

- (1) 弟子たちと、使いの者たちだけが目撃した。
 - ①私的奇跡である。

- (2) この奇跡によって、弟子たちはイエスを信じた。

2. 第2の「しるし」

「そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。イエスはユダヤを去ってガリラヤに入られてから、またこのことを第二のしるしとして行われたのである」(54節)

- (1) これもまた、私的奇跡である。

- (2) 息子の癒しが主要テーマではない。

(例話) サマリヤの女の救いではなく、町の人たちの信仰告白がテーマであった。

 - ①父親の、魂の癒し
 - ②彼の家の者の救い

- (3) カナ・サイクルは、信仰で始まり、信仰で終わっている。

結論： 信仰の成長

1. 王室の役人の信仰の成長

(1) 「しるし」を求める信仰

「この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところへ行き、下って来て息子をいやしてくださるよう願った。息子が死にかかっていたからである。そこで、イエスは彼に言われた。『あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない』(47～48節)

(2) イエスのことばをそのまま信じる信仰

「イエスは彼に言われた。『帰って行きなさい。あなたの息子は直っています』。その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた」(50節)

(3) より高度な信仰

「それで父親は、イエスが『あなたの息子は直っている』と言われた時刻と同じであることを知った。そして彼自身と彼の家の者がみな信じた」(53節)

- ①イエスは、空間に束縛されないお方であるとの信仰
- ②体験的信仰

2. 私たちの信仰の成長

(1) 「しるし」を求める信仰

- ①私たちには、さまざまな願いがある。
- ②「〇〇を聞いてくださったなら、信じます」という祈りをすることがある。
- ③これは、本物の信仰ではない。
- ④時としてそれが聞かれるのは、一方的な神の恵みである。
- ⑤このような信仰の問題点は、神を支配することにある。

(2) みことばをそのまま信じる信仰

- ①神のことばに支配される信仰であり、さらに成長した状態にある。
- ②そのために、聖書研究をする必要がある。

(3) より高度な信仰

- ①時間的、空間的距離を乗り越える信仰である。
- ②つまり、見ないで信じる信仰である。
- ③私たちは、主イエスを見たことはないが、信じている。
*見ていないというのは、信仰が働くための文脈となる。

「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています」(1ペテ1:8)

④ヨハネの福音書のクライマックスは、トマスの信仰告白である。

「トマスは答えてイエスに言った。『私の主。私の神』。イエスは彼に言われた。『あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです』(ヨハ20:28~29)

「ナザレでの拒否」

§ 039 ルカ 4 : 16~30

1. はじめに

(1) ガリラヤ伝道が始まっている。

- ①約1年半続く。
- ②前回は、カナにおいて「第2のしるし」が行われた。
- ③実際は、カペナウムで起こった奇跡である。
- ④イエスが、時間と空間を超えて奇跡を行う方であることが示された。
- ⑤「しるし」とは、イエスのメシア性を示すものである。

(2) その後、イエスは故郷のナザレに行かれた。

- ①この箇所は、ナザレにおける第1回目の拒否である。
- ②マコ6:1~6には、第2回目の拒否が出て来る。
- ③この二つは、別の記事である。

(3) A. T. ロバートソンの調和表
ナザレでの最初の拒否 (§ 39)

(4) 優れたメッセージを聴きたいという願望

- ①ビリー・グラハム、②ジョン・ストット、③イエスのメッセージを聴く特権

2. アウトライン

- (1) 会堂での礼拝の様子 (16~19 節)
- (2) イエスのメッセージ (20~27 節)
- (3) ナザレの人々の応答 (28~30 節)

3. メッセージのゴール

- (1) ナザレの象徴的意味
- (2) イエスの奉仕のパラダイム (枠組み)

このメッセージは、ナザレで起きたことの象徴的意味を学ぼうとするものである。

I. 会堂での礼拝の様子 (16~19 節)

1. 会堂に入るイエス

「それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおりに安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた」(16節)

- (1) ルカは、ナザレがイエスの育った村だという情報を伝えている。
 - ①ルカ2:51では、12歳のイエスがナザレに帰り、両親に仕えたと記されている。

 - (2) イエスには、安息日に会堂に行く習慣があった。
 - ①会堂は、神殿ではない。
 - ②バビロン捕囚以降、ディアスポラの地だけでなく、約束の地にも広がった。
 - ③信仰を大切にしている善良なユダヤ人なら、安息日には会堂に行った。

 - (3) 「朗読しようとして立たれた」
 - ①自分勝手に、そうしているのではない。

 - (4) 当時の習慣
 - ①トーラーの朗読
 - *その週の朗読箇所が決まっている(数章を部分に分け、月、木、土に朗読)。
 - *1年のサイクルが終わると、シムハット・トーラーという祝いをする。
 - *仮庵の祭りの最終日がそれに当たる。
 - *2012年の今年は、10月7日の夜から始まる。
 - *紀元1世紀の頃は、3年サイクルで朗読していた。
 - ②預言書の朗読
 - *その日のトーラーの箇所と関連した箇所
 - *ハフタラーという(結論という意味)。
 - ③朗読の後、奨励のメッセージが語られる。
 - *朗読する時は、立って朗読した。
 - *奨励のメッセージの時は、座った。
 - ④朗読も、奨励のメッセージも、会堂管理者の判断で行われた。
- 使13:14~15(パウロとバルナバの例)
- 「しかし彼らは、ペルガから進んでピシデヤのアンテオケに行き、安息日に会堂に入って席に着いた。律法と預言者の朗読があつて後、会堂の管理者たちが、彼らのところに人をやってこう言させた。『兄弟たち。あなたがたのうちどなたか、この人たちのために奨励のことばがあつたら、どうぞお話しください』」
- (5) 会堂管理者がイエスを前に招いた。
 - ①イエスは、ガリラヤ一帯で有名になっていた。

- ②また、尊敬されていた(ルカ4:14~15)。
- ③人々の間に期待感があった。

2. 朗読するイエス

「すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた」(17節)

- (1) イエスは立って、朗読した。
 - ①これは、ハフタラー(預言書)である。
 - ②イザヤ書である。
 - ③この書は、巻物である。死海写本では、ひとつの巻物になっている。
- (2) イエスは、その安息日に朗読が予定されていた箇所を読んだのか。
 - ①もしそうなら、ここには摂理的な導きがある。
 - ②恐らく、そうではないだろう。
 - ③イエスは、自らイザヤ書中の特定の箇所を探し、そこを読まれたのだろう。

3. 朗読された箇所

「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油をそそがれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために」(18~19節)

(1) イザ61:1~2の引用

「神である主の霊が、わたしの上にある。【主】はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、【主】の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、」

- ①イザ61:1~3は、メシア預言と考えられていた。
- (2) 2つの変則的事項が起こっている。
 - ①当時は、最低3節を朗読したが、イエスは途中で止めている。
 - ②2節の後半「われわれの神の復讐の日を告げ、」も読まなかった。
 - *これは再臨の時に成就する預言である。
 - *ローマの圧政に苦しむナザレの人たちには、不満が残る。

II. イエスのメッセージ (20～27 節)

1. 朗読から勧めのメッセージへの移行

「イエスは書を巻き、係りの者に渡してすわられた。会堂にいるみな目の目がイエスに注がれた」(20 節)

(1) メッセージの時は、座るのが当時の習慣である。

①そのまま自分の席に帰らなかったのは、メッセージが始まることのしるし。

(2) 出席者は、イエスに注目した。

①ルカ 22 : 56 では、女中がペテロを見た目。「まじまじと見て」

②2 コリ 3 : 7 では、山から下りてきたモーセの顔を見る目。「見つめる」

③イエスの内に、単に優れた説教者以上の何かがあったのだろう。

2. 最初のことば

「イエスは人々にこう言って話し始められた。『きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりに実現しました』」(21 節)

(1) イエスは、最初のことばの重要性を知っていた。

①ここは、講解メッセージにおいて、最初に適用を語るようなものである。

(2) 訳文の比較

「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりに実現しました」(新改訳)

「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(新共同訳)

「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」(口語訳)

「この聖書今日なんぢらの耳に成就したり」(文語訳)

(3) イエスのメシア宣言

①ユダヤ人たちが長年待ち望んできたメシア

②イザヤが預言していたメシア

③そのメシアが、今ナザレの会堂に立ち、旧知の人々の前で語っている。

④強調は、「きょう」という言葉にある。

⑤今、待ち望んでいた「終末の時代」が到来した。

3. 聴衆の反応

「みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。そしてまた、『この人は、ヨセフの子ではないか』と彼らは言った」(22 節)

(1) 積極的反応

- ①イエスは、噂通り、あるいは、それ以上のお方である。
- ②恵みのことばは、予想をはるかに超えるものである。

(2) 消極的反応

- ①「この人は、ヨセフの子ではないか」
- ②「いったいどうなってんだ。ただのヨセフのせがれじゃないか」(リビングバ イブル)
- ③「あいつは、ヨセフの小僧じゃねえのか」(私訳)
- ④これは、「Yes」という答えを求める質問の形である。

4. イエスの応答

「イエスは言われた。『きっとあなたがたは、『医者よ。自分を直せ』というたとえを引いて、カペナウムで行われたと聞いていることを、あなたの郷里のここでもしてくれ、と言うでしょう』。また、こう言われた。『まことに、あなたがたに告げます。預言者はだれでも、自分の郷里では歓迎されません』(23～24節)

(1) 「医者よ。自分を直せ」というたとえの意味

- ①名医であることを証明するために、まず自分の病を癒してみろ。
- ②ここには、皮肉が込められている。
- ③日本の格言
 - * 「紺屋(こうや)の白袴」
 - * 「医者の不養生」

(2) ナザレの人々の期待

- ①メシア性を主張するなら、カペナウムで行われたのと同様の奇跡を行え。
- ②自分の郷里でまず奇跡を行うべきではないか。そうしたら信じてやる。

(3) 「預言者はだれでも、自分の郷里では歓迎されません」

- ①イエスは、ナザレ以外の場所では大いに尊敬された。
- ②ナザレの人々の問題は、プライドである。
(例話) その教会の信徒であった人が、牧師として立つのは容易ではない。

5. 旧約聖書の例

「わたしが言うのは真実のことです。エリヤの時代に、三年六か月の間天が閉じて、全国に大ききんが起こったとき、イスラエルにもやもめは多くいたが、エリヤはだれのところにも遣わされず、シドンのサレプタにいたやもめ女にだけ遣わされたのです。また、預言

者エリシャのときに、イスラエルには、ツァラアトに冒された人がたくさんいたが、そのうちのだれもきよめられないで、シリヤ人ナアマンだけがきよめられました」(25～27節)

(1) エリヤの例

①1列17～18章

②「シドンのサレプタにいたやもめ女」とは、異邦人の女である。

(2) エリシャの例

①2列5章

②「ツァラアト」（新改訳）、「重い皮膚病」（新共同訳）

③「シリヤ人ナアマン」は、異邦人の将軍である。

(3) 共通している点

①イスラエルは不信仰の状態にあった。

②そこで神は、イスラエルではなく、異邦人を祝福された。

III. ナザレの人々の応答（28～29節）

1. 激怒する人々

「これらのことを聞くと、会堂にいた人たちはみな、ひどく怒り、立ち上がってイエスを町の外に追い出し、町が立っていた丘のがけのふちまで連れて行き、そこから投げ落とそうとした」(28～29節)

(1) 激怒の理由

①自分たちのことを言われている。

②ユダヤ人よりも、異邦人が優遇される。

(2) 激怒の結果

①会堂にいた人たち全員が立ち上がり、イエスを町の外に追い出した。

②丘の崖のふちから、イエスを投げ落とそうとした。

*今も、「突き落としの崖」と言われる場所がある。

2. イエスの脱出

「しかしイエスは、彼らの真ん中を通り抜けて、行ってしまわれた」(30節)

(1) 逃れた方法については、記されていない。

①むしろ、死ななかつた意味の方が重要である。

②十字架の時が来ていないからである。

結論：

1. ナザレの象徴的意味

(1) メシア預言の直接的成就がある。

①イザ61:1~2

(2) メシアの型がある。

①エリヤ

②エリシャ

(3) ナザレはイスラエル全体を象徴する小宇宙である。

①ナザレは2度にわたってイエスを拒否する。

②イスラエルは徐々にイエスを拒否する方向に向かう。

③「突き落としの崖」の事件は、イエスの死を予感させる。

*ただし、読者には最後までそれが隠されている。

2. イエスの奉仕のパラダイム(枠組み)

(1) 今、メシア預言が成就し、終末時代に入った。

(2) イスラエルはイエスをメシアとして受け入れない。

①メシア的王国の提供を拒否した。

(3) そこで、異邦人が救いに招かれる。

①これが教会時代の出来事である。

②メシア的王国の成就是、再臨以降に持ち越された。

(4) ヨハ1:11~12

「この方はご自分のくんに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」

(5) 私たちへの適用

①神の痛み。

(例話) 母親との会話。「子どもについての心配はない」

②教会時代の伝道において、私たちも同じ痛みを経験する。

「悪霊に対する権威」

§ 040 マタ 4 : 13~16

§ 042 マコ 1 : 21~28、ルカ 4 : 31~37

1. はじめに

(1) ナザレでの伝道

- ①イエスのメシア宣言
- ②ナザレの人々の不信仰
- ③そこでイエスは、カペナウムに下る。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

新しい拠点カペナウム (§ 40)

安息日での悪霊の追い出し (§ 42)

- ① § 41 は、弟子たちの召しであるが、これは後に取り扱う。
- ②ルカの福音書の順序に従う。

(3) イエスの動きの概観

- ①公生涯に入って以降、ナザレが拠点になったことはない。
- ②カナの婚礼の奇跡の後、イエスは短期間カペナウムに住まわれた。
- ③この箇所から、イエスはカペナウムを拠点として活動される。
- ④この状態が、十字架につく半年前に、ユダヤに向かって出発するまで続く。
- ⑤その間イエスは、エルサレムに上ったり、ガリラヤを巡回されたりした。

2. アウトライン

(1) カペナウムに移り住むイエス (マタ 4 : 13~16)

- ①理由その1
- ②理由その2

(2) 会堂で教えるイエス (マコ 1 : 21~28、ルカ 4 : 31~37)

- ①イエスの教え
- ②反応する悪霊
- ③悪霊の追い出し
- ④人々の驚き

3. メッセージのゴール

- (1) 悪霊と私たちの関係
- (2) イエスのメッセージの特徴

このメッセージは、イエスのメシアとしての権威について学ぼうとするものである。

I. カペナウムに移り住むイエス (マタ 4 : 13~16)

1. 理由その1—宣教のための戦略

「そしてナザレを去って、カペナウムに来て住まわれた。ゼブルンとナフタリとの境にある、湖のほとりの町である」(13節)

(1) ナザレでの拒否

- ①ナザレは、ゼブルンの地にあった。
- ②ヨシュアの時代に、ゼブルン族とナフタリ族がガリラヤを征服した。
- ③ナザレを去ったのは、家族や共同体との別離を意味する。

(2) カペナウムに下った。

- ①カペナウムは、ナフタリの地にあった。
*ナホムの村、あるいは、慰めの村
- ②イエスは、ゼブルンの地で育ち、ナフタリの地で奉仕をされた。

(3) カペナウムは、拠点にふさわしい地である。

- ①本来は漁業の町である。
- ②交通の要衝の地であるため、異邦人たちの往来があった。
- ③ギリシア・ローマ風の町々に囲まれていた。
- ④人々は、新しい教えに対してよりオープンであった。

2. 理由その2—預言の成就

「これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、『ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った』」(14~16節)

(1) イザ 9 : 1~2 の預言

- ①イエスの奉仕は、ガリラヤから始まり、エルサレムで完了する。
- ②イエスの奉仕の対象は、「死の地と死の陰にすわっていた人々」である。
*物理的状态
*霊的状态

③イエスの奉仕の対象は、ユダヤ人と異邦人が混在したグループである。

*イエスは第一義的には、ユダヤ人のために奉仕をされた。

*しかし、異邦人の救いが常に念頭にあった。

④イエスは光である。

「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた」(ヨハ1:9)

「わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです」(ヨハ12:46)

II. 会堂で教えるイエス (マコ1:21~28)

1. イエスの教え (21~22節)

「それから、一行はカペナウムに入った。そしてすぐに、イエスは安息日に会堂に入って教えられた。人々は、その教えに驚いた。それはイエスが、律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教えられたからである」

(1) ある安息日選ばれているが、これは典型的な例である。

①イエス時代のこの町の人口は千人前後と推定される。

②会堂の遺跡が、1900年代初頭に発掘された。

③玄武岩の上に、紀元4世紀の白色石灰石の会堂が建てられている。

④会堂の規模は、長さが20メートルで2階建てである。

(2) イエスが安息日に会堂に行くのは、習慣になっていた。

①トーラーと預言書の朗読の後で、奨励のメッセージが語られた。

②イエスは、会堂の管理者の要請で、人々に教えた。

(3) 人々は、非常に驚いた。

「人々その教に驚きあへり」(文語訳)

①律法学者の教え

*過去のラビたちの教えを引用し、その上に自分の教えを付け加えた。

②イエスの教え

*誰の権威に依存することもなしに、権威をもって教えた。

2. 反応する悪霊 (23~24節)

「すると、すぐにまた、その会堂に汚れた霊につかれた人がいて、叫んで言った。『ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です』」

- (1) 悪霊は、人々よりも先に、イエスが誰であることを認識した。
 - ① 叫んでいるのは、その人の内側に住みついている悪霊である。

- (2) 「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです」
 - ① 悪霊を追い出す際には、その悪霊の名を呼んで、支配権を確立した。
 - ② 悪霊は、「ナザレの人イエス」と呼んで、支配権を確立しようとしたのか？
 - ③ 「あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです」(口語訳)
 - *ヘブル的用語である。対立する力があり、調和できない状態を指す。

- (3) 「あなたは私たちに滅ぼしに来たのでしょうか」
 - ① 単数の悪霊が、「私たち」と言っている。
 - ② イエスの存在が、悪霊集団にとっていかに危険なものであるかを知っていた。
 - ③ 荒野の誘惑に失敗した悪魔が、悪霊集団に情報を伝達したのであろう。
 - *悪のネットワークの存在

- (4) 「私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です」
 - ① 「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」(新共同訳)
 - ② 「やい、ナザレのイエス！ おれたちをどうしようというんだい。おれたちを滅ぼすために来たんだろうが。あんたのことはよく知ってるぜ。そうとも、神のきよい御子様よ！」(リビングバイブル)
 - ③ 「神の聖者」(Holy One of God) とはどういう意味か。
 - *「聖者(Holy One)」とは、神である。
 - *「神の聖者」(Holy One of God) とは、神の第一の使者という意味。
 - *聖霊によって力を受けている。特別な使命のために遣わされている。
 - *悪霊は、イエスの権威の源を見抜いている。

3. 悪霊の追い出し(25～26節)

「イエスは彼をしかって、『黙れ。この人から出て行け』と言われた。すると、その汚れた霊はその人をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った」

- (1) 「イエスはこれをしかって、『黙れ、この人から出て行け』と言われた」(口語訳)
 - ① イエスが叱っているのは、悪霊である。
 - ② イエスは、悪霊の証しを必要としない。
 - ③ 悪霊の証言は、認められない。

(2) 悪霊が去る時の現象

①悪霊は、その人をひきつけさせた。

②ルカ4:35

「するとその悪霊は人々の真ん中で、その人を投げ倒して出て行ったが、その人は別に何の害も受けなかった」

③大声をあげた(悪霊がその人に声を上げさせている)。

4. 人々の驚き(27~28節)

「人々はみな驚いて、互いに論じ合って言った。『これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ』。こうして、イエスの評判は、すぐに、ガリラヤ全地の至る所に広まった」

(1) 驚きの理由

①イエスが通常悪霊の追い出しとは異なった方法で、悪霊を追い出したから。

②命じるだけで、悪霊は従う。

(2) 人々は、イエスの教えが権威あるものだと認めた。

①権威ある教えと悪霊の追い出しは、イエスのメシア性を証明するものとなった。

②イエスの評判が、短時間の内にガリラヤ全地に広がるのも当然のことである。

結論：

1. 悪霊と私たちの関係

(1) 悪霊につかれているとは：

「ある人の中に悪霊が住み、ある種の精神的錯乱や肉体的不調を用いて、その人を直接的に支配している状態のことである」

(2) 区別の必要性

①悪霊につかれているのか、精神的原因によるものなのか。

②悪霊につかれているのか、悪霊の攻撃なのか(外からのもの)。

(3) 信者は悪霊に支配されるか。

①悪霊の所有物にはならない(完全に支配されることはない)。

「あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」(1コリ6:20)

②しかし、悪霊が内側から信者を支配することはある。

「そこで、ペテロがこう言った。『アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪

われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか』(使5:3)

「悪魔に機会を与えないようにしなさい」(エペ4:27)

*機会とは、場所、上陸地点のことである。

③信者と未信者の違いは、支配の度合いの違いである。

*信者には2つの性質がある。

*聖霊は、新しい性質の内に宿る。

*悪霊は、罪の性質の内に宿る。

(4) 福音書は、現代の悪霊の活動を判断するための規準とはなり得ない。

2. イエスのメッセージの特徴

あ：愛—イエスは、愛をもって語った。

①律法学者たちは、往々にして、個人的な利得を求めていた。

「また、やもめの家を食いつぶし、見えを飾るために長い祈りをします。こういう人たちは人一倍きびしい罰を受けるのです」(マコ12:40)

②イエスは、聴衆の最善を求めた。

*父なる神を指し示した。

い：いのち—イエスは、人生の重要テーマについて語った。

①律法学者たちは、どうしてもよいことを話題にした。

「わざわざだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは、はっか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実を、おろそかにしているのです。これこそしなければならぬことです。ただし、十分の一もおろそかにしてはいけません」(マタ23:23)

②イエスは、生死に関わることを語った。

う：動き—イエスは、着地点に向かって語った。

①律法学者たちは、荒野をさ迷うようなメッセージを語った。

「ユダヤ人の空想話や、真理から離れた人々の戒めには心を寄せないようにさせなさい」(テト1:14)

②イエスは、父なる神に向かわせるメッセージを語った。

え：絵—イエスは、たとえを用いて語った。

①律法学者たちは、感動のない教えを語った。

②イエスは、人々の関心を呼ぶ方法を知っておられた。

お：お墨付き（authority）—イエスは、権威を持って語った。

①律法学者の権威は、前の時代のラビたちに依存している。

②イエスの権威は、父なる神から与えられたものである。

*悪霊に対する権威

*病に対する権威

「ペテロの姑の癒し」

§ 043 マコ 1 : 29~34、マタ 8 : 14~17、ルカ 4 : 38~41

1. はじめに

(1) カペナウムを拠点とした伝道が始まった。

①戦略的な選択

②預言の成就

③イエスの権威は、悪霊の追い出しによって示された。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

ペテロの姑の癒し (§ 43)

2. アウトライン（交差対句法。キアスモス）

(1) 悪霊の追い出し（4 : 31~37 の復習）

(2) 病の癒し（4 : 38~39）

(3) 病の癒し（4 : 40）

(4) 悪霊の追い出し（4 : 41）

3. メッセージのゴール

(1) ペテロの人物像

(2) クリスチャンの奉仕

このメッセージは、イエスの権威に対する応答について学ぼうとするものである。

I. 悪霊の追い出し（4 : 31~37。前回はマコ 1 : 21~28 を取り上げた）

1. 権威ある教え

(1) 律法学者のようではない。

①父なる神から、直接権威を受けていた。

2. 悪霊が真っ先に反応した。

(1) イエスの名前を知っていた。

①イエスを「神の聖者」と呼んだ。

②イエスが悪霊集団にとって危険な人物であることを知っていた。

3. イエスは悪霊を追い出した。

- (1) イエスは、悪霊の証言を認めなかった。
 - ①悪霊は嘘つきである。

- (2) ことばで命じただけで、悪霊は出て行った。
 - ①ユダヤ人の悪霊追い出しの方法とは異なる。
 - ②これもまた、人々の驚きに理由であった。

- (3) 悪霊の追い出しは、完璧であった。
 - ①直ちに悪霊が出て行った。
 - ②その人には何の傷も、後遺症もなかった。
 - ③医者ルカは、こう記している。

「するとその悪霊は人々の真ん中で、その人を投げ倒して出て行ったが、その人は別に何の害も受けなかった」(ルカ4:35b)

II. 病の癒し(4:38~39)

1. 38節

「イエスは立ち上がって会堂を出て、シモンの家に入られた。すると、シモンのしゅうとめが、ひどい熱で苦しんでいた。人々は彼女のためにイエスをお願いした」

- (1) 会堂からシモンの家へ
 - ①「立ち上がって」とは、説教者の席から立ってという意味であろう。
 - ②会堂での礼拝を終えると、帰宅して食卓に着くのが当時の習慣である。
 - ③会堂からシモンの家までは、徒歩で1~2分の距離である。

「ある安息日に、食事をしようとして、パリサイ派のある指導者の家に入られたとき、みんながじっとイエスを見つめていた」(ルカ14:1)

- (2) 会堂だけでなく、シモンの家にも問題は存在していた。
 - ①シモンの姑が病気であった。
 - ②ルカだけが、「ひどい熱で苦しんでいた」と記している。
 - *医学用語である。
 - *恐らく慢性的熱病であろう。

- (3) 人々の間に、イエスに対する信仰が芽生えていた。
 - ①悪霊の追い出しを目撃した。
 - ②「人々は彼女のためにイエスをお願いした」

2. 39節

「イエスはその枕もとに来て、熱をしかりつけられると、熱がひき、彼女はすぐに立ち上がって彼らをもてなし始めた」

(1) 訳語の比較

「その枕もとに来て」(新改訳)

「枕もとに立って」(新共同訳)

「その傍らに立ちて」(文語訳)

「So he bent over her」(NIV)

- ①床に「床」を敷き、そこに寝るのが当時のスタイルである。
- ②イエスは、慈悲深い医師の姿勢で臨んだ。

(2) 癒しの方法

- ①「熱をしかりつけられると」
- ②悪霊の場合と同様に、ことばによる癒しである。
- ③人でなく、病に命じている箇所は、ここだけである。

(3) ことばの権威

- ①直ちに熱が引いた。
- ②「彼女はすぐに立ち上がって彼らをもてなし始めた」
- ③癒しは直ちに起こり、なんの後遺症も、疲れも残さなかった。

III. 病の癒し (4:40)

1. 40節

「日が暮れると、いろいろな病気で弱っている者をかかえた人たちがみな、その病人をみもとに連れて来た。イエスは、ひとりひとりに手を置いて、いやされた」

(1) 日が暮れると、安息日が終わる。

- ①安息日に病人を運ぶことは、律法違反である。
- ②安息日に病人を癒すのも、律法違反である。
- ③イエスは、このようなパリサイ的律法に反して癒しを行うようになる。

(2) 悪霊の追い出しと、熱病の癒しの噂が、町全体に伝わっていた。

- ①いろいろな病気の人たちが、イエスのもとに連れて来られた。

(3) 癒しの方法

- ①イエスは、ひとりひとりを大切に扱われた。
- ②手を置いて癒すのは、旧約聖書にはないが、新約聖書ではよくある。

IV. 悪霊の追い出し (4 : 41)

1. 41 節

「また、悪霊どもも、『あなたこそ神の子です』と大声で叫びながら、多くの人から出て行った。イエスは、悪霊どもをしかって、ものを言うのをお許しにならなかった。彼らはイエスがキリストであることを知っていたからである」

- (1) ルカは、病と悪霊付きとを区別している。
- (2) 悪霊どもの知識の進展
 - ①「神の聖者」
 - ②「神の子」 = 「キリスト (メシア)」
 - ③知っていることと、その権威に服従することとは、別物である。
- (3) イエスは、悪霊の証言を認めない。

結論 :

1. ペテロの人物像

- (1) マコ 1 : 29 の情報では、4 人の名前が出て来る。

「イエスは会堂を出るとすぐに、ヤコブとヨハネを連れて、シモンとアンデレの家に入られた」 (マコ 1 : 29)

 - ①ルカでは、シモンの名前だけである (他の 3 人の名はまだ紹介されていない)。
- (2) シモンには妻がいた。
 - ①妻の父は亡くなったので、妻の母を自分の家に引き取ったのであろう。

「私たちには、ほかの使徒、主の兄弟たち、ケパなどと違って、信者である妻を連れて歩く権利がないのでしょうか」 (1 コリ 9 : 5)
- (3) シモンには、家があり、職業があり、家族がいた。
 - ①召命を受けた時、彼はカペナウムのユダヤ人共同体に根を張った大人であった。
 - ②ルカの福音書では、6 : 14 でペテロという名に変わっている。

2. クリスチャンの奉仕

(1) イエスから受けた恵みが、奉仕の土台である。

(2) 並行記事の比較

「イエスはその枕もとに来て、熱をしっかりとつけられると、熱がひき、彼女はすぐに立ち上がって彼らをもてなし始めた」(ルカ4:39)

「イエスは、彼女に近寄り、その手を取って起こされた。すると熱がひき、彼女は彼らをもてなした」(マコ1:31)

「イエスが手にさわられると、熱がひき、彼女は起きてイエスをもてなした」(マタ8:15)

(3) メシア像

①ルカは、完ぺきな人間としてのメシア像を描いた。

②マルコは、しもべとしてのメシア像を描いた。

③マタイは、王としてのメシア像を描いた。

(4) ルカは、女性の癒しを記録している。

①悪霊憑きは男、熱病の病人は女である。

②シモンの姑は、すぐに立ちあがって、彼らをもてなし始めた。

*奴隷がいない家では、大人の女性が、客をもてなす役目を果たした。

③もてなしとは、奉仕(ディアコネオウ)である。

「女たちどころに起きて彼らに事(つか)ふ」(文語訳)

④ルカは、奉仕する女性たちを多く描いている。

(5) 闇と光の対比

①悪霊

②病

③パリサイ的律法

④そして、絶望

⑤イエスは、希望である。

*信仰、希望、愛、そして、喜びである。

(6) 神の恵みの後には、感謝と奉仕が続くべきである。

①姑の癒しは、ペテロの召命への序曲となっている。

「4人の弟子たちの召命」

§ 044 マコ 1 : 35～39、**マタ 4 : 23～25**、ルカ 4 : 42～44

§ 041 マコ 1 : 16～20、マタ 4 : 18～22、**ルカ 5 : 1～11**

1. はじめに

(1) カペナウムを拠点とした伝道が始まった。

- ①イエスの権威は、悪霊の追い出しによって示された。
- ②イエスの権威は、病の癒しによって示された。
- ③4人の弟子たちが召されるのが、きょうの箇所である。

(2) **A. T. ロバートソンの調和表**

第一回目のガリラヤ巡回伝道 (§ 44)

4人の弟子たちの召命 (§ 41)

2. 第一回目のガリラヤ巡回伝道 (マタ 4 : 23～25)

(1) 古代文学の特徴

- ①物語
- ②それに対する解説
- ③そして、まとめ

(2) まとめの内容

- ①会堂で教えた。
- ②教えの内容は、神の国の福音であった。
- ③教えの権威は、癒しと悪霊の追い出しによって証明された。
- ④その結果、多くの人々がイエスにつき従った。

*シリア (ユダヤ人共同体があった)

*ガリラヤ

*デカポリス (10のギリシア風の町)

*エルサレム

*ユダヤ

*ヨルダンの向こう岸

3. アウトライン (ルカ 5 : 1～11)

- (1) イエスの知恵 (1～3節)
- (2) イエスの知識 (4～5節)

- (3) イエスの寛大さ (6~7 節)
- (4) イエスの主権 (8~11 節)

4. メッセージのゴール

- (1) ペテロの体験から学ぶクリスチャンの生活のステップ

このメッセージは、イエスの権威に対する応答について学ぼうとするものである。

I. イエスの知恵 (1~3 節)

1. 1~2 節

「群衆がイエスに押し迫るようにして神のことばを聞いたとき、イエスはゲネサレ湖の岸べに立っておられたが、岸べに小舟が二そうあるのをご覧になった。漁師たちは、その舟から降りて網を洗っていた」

- (1) ある日のイエスの活動が取り上げられている。
 - ①群衆がイエスの周りに群がっていた。
 - ②「神のことば」とは、「神からくることば」であり、「福音」である。
 - ③イエスは、湖畔に立っていた。
 - *危険であるし、効果的ではない。
 - ④「ゲネサレ湖」とは、ガリラヤ湖のことである。
 - *ゲネサレは、ガリラヤ湖の北西の地域。カペナウムは真北に当たる。
 - *地域の名称が、湖の名称となった。
- (2) 小舟が二そうあるのに着目された。
 - ①漁師たちは、その日の仕事を終えていた。
 - ②彼らは、舟から降りて網を洗っていた。
 - *魚以外のゴミが網に入る。
 - *翌日の仕事の準備をしていた。
 - ③二そうとあるのは、後に出てくる大漁物語への布石である。

2. 3 節

「イエスは、そのうちの一つの、シモンの持ち舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すように頼まれた。そしてイエスはすわって、舟から群衆を教えられた」

- (1) 姑の病の癒しの後の出来事である。
 - ①それまでは与えるばかりであったイエスが、シモンに頼まれた。
 - ②シモンは喜んで応答したことであろう。

③イエスは舟を必要とした(奇跡の経済学)。

(2) イエスの知恵

- ①群衆からは離れているので、安全である。
- ②群衆を見渡せる。
- ③音響効果が抜群である。
- ④ラビとして教えることができる(イエスは、すわって教えている)。

(3) イエスの自由な発想

- ①神殿、会堂がイエスの活動の場であった。
- ②ここでは、舟の上が講壇になった。
- ③家、丘、墓場なども、講壇となった。

II. イエスの知識(4~5節)

1. 4節

「話が終わると、シモンに、『深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい』と言われた」

(1) 落胆したシモンへの命令のことばである。

- ①イエスは、深みに行けば、魚が大量にいることを知っていた。
- ②このことばは、字義通りに解釈する必要がある。

(2) この命令には、無数の適用がある。

- ①人間の判断と神の判断のかい離
- ②人間の落胆と神のチャンスの関係

2. 5節

「するとシモンが答えて言った。『先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみましよう』」

(1) 「先生」

- ①ギリシア語で「エピスタテイス」(エピスタタ)である。
- ②これは、ヘブル語の「ラビ」のギリシア語訳である。
- ③シモンはイエスを、ラビと呼んでいる。
- ④宗教的なテーマなら、ラビの指示に従うのは当然のことである。

(2) イエスの命令は、漁に関するものである。

①これは、シモンの専門分野である。

(3) 「私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした」

①ガリラヤ湖の漁は、暗い間に行く。

②明るくなると、魚は深みに潜るので、獲れなくなる。

③従って、イエスの命令は非常識なものである。

(4) 「でもおことばどおり、網をおろしてみましよう」

①シモンの従順から教訓を学ぼう。

Ⅲ. イエスの寛大さ (6～7 節)

1. 6 節

「そして、そのとおりにすると、たくさんの魚が入り、網は破れそうになった」

(1) 従順に従った結果、大漁になった。

①これは、刺し網漁である。

②網が破れそうになった (漁師だから分かる)。

③イエスは、大盤ふるまいをされた。

(2) 旧約聖書の例

①出 16 : 13 うずらの奇跡

②2 列 4 : 1～7 エリシャの奇跡。器がある間は、そこに油が満ちた。

③2 列 4 : 42～44

「ある人がバアル・シャリシャから来て、神の人に初穂のパンである大麦のパン二十個と、一袋の新穀とを持って来た。神の人は、『この人たちに与えて食べさせなさい』と命じた。彼の召使いは、『これだけで、どうして百人もの人に分けられましょう』と言った。しかし、エリシャは言った。『この人たちに与えて食べさせなさい。【主】はこう仰せられる。「彼らは食べて残すだろう」』。そこで、召使いが彼らに配ると、彼らは食べた。【主】のことばのとおり、それはあり余った」

2. 7 節

「そこで別の舟にいた仲間の者たちに合図をして、助けに来てくれるように頼んだ。彼らがやって来て、そして魚を両方の舟いっぱい上げたところ、二そうとも沈みそうになっ

た」

(1) 「仲間の者たち」

- ①漁は、共同作業である。
- ②網や舟を共有し、作業効率を上げた。
- ③シモンの家とゼバダイの家とは、協力関係にあったのであろう。

(2) 余りの大漁で、二そうとも沈みそうになった。

- ①実際に沈んだわけではない。

IV. イエスの主権 (8～11 節)

1. 8～9 節

「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、『主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから』と言った。それは、大漁のため、彼もいっしょにいたみなのも、ひどく驚いたからである」

(1) ルカは、シモンに焦点を合わせて描いている。

- ①シモン以外の者たちも、同様の反応を示したはずである。
- ②「シモン・ペテロ」というフルネームになっている。
- ③極端から極端に行くのは、シモンの特徴である。

(2) イエスの足元にひれ伏した。

- ①神を礼拝する時の姿勢である。

(3) 「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」

- ①「先生」(ラビ) から「主よ」(キュリオス) への変化。
- ②イエスは文字通りには、舟から離れられない。
 - * 「私の罪を赦して下さい」
 - * 「あなたのようなお方が、私と何の関係があるのですか」
- ③神に出会うことは、自らの罪深さを認識することである。

2. 10 節

「シモンの仲間であったゼバダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンにこう言われた。『こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです』」

(1) アンデレ、ヤコブ、ヨハネの登場

①彼らもまた、同じ経験をしていた。

(2) 彼らの職業は、魚を獲ることから、人間を獲ることに変えられた。

①ピリポ、ナタナエルを加えると、6人の弟子集団となった。

②大漁の奇跡は、使徒たちの伝道によって多くの魂が救われることの手筈である。

3. 11 節

「彼らは、舟を陸に着けると、何もかも捨てて、イエスに従った」

(1) 安定した漁師の仕事を捨てて、イエスの弟子となった。

(2) マコ 1 : 16~20

「ガリラヤ湖のほとりを通られると、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。イエスは彼らに言われた。『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。』すると、すぐに、彼らは網を捨て置いて従った。また少し行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネをご覧になった。彼らも舟の中で網を繕っていた。すぐに、イエスが呼びになった。すると彼らは父ゼベダイを雇い人たちといっしょに舟に残して、イエスについて行

た」

①網、父、舟を残して、イエスに従った。

②完ぺきな献身である。

結論：ペテロの体験から学ぶクリスチャンの生活のステップ

1. 神との出会い

(1) ペテロは、イエスが神であることを体験した。

①カナの婚礼、エルサレムでの奇跡、悪霊の追い出し、姑の癒し

②大漁の奇跡は、ペテロの専門分野での奇跡である。

③また、日常生活における奇跡である。

④ペテロは、実存的に神に出会ったのである。

(2) 真の宗教体験は、神との出会いから始まる。

①他宗教の方が求道するのは、非常に困難なことである。

②聖書の神を求める心が、最重要である。

(3) 神との出会いは、聖書研究によって与えられる。

- ①デボーションの勧め
- ②講解メッセージの勧め

2. 罪の認識

(1) ペテロの反応は、ユダヤ人が神の臨在に触れた時に示すものである。

- ①神の聖さと栄光
- ②自分の汚れと罪の認識
- ③ペテロは不信仰ではなかった。一般的な意味での罪の認識である。

(2) イザヤと同じ体験

「そこで、私は言った。『ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の【主】である王を、この目で見ただから』」（イザ6：5）

3. 罪の赦し

(1) 聖句

「こわがらなくてもよい」（ルカ5：10）

「すると、私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。彼は、私の口に触れて言った。『見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた』」（イザ6：～7）

4. 召命

(1) 聖句

「これから後、あなたは人間をとるようになるのです」（ルカ5：10）

「私は、『だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう』と言っておられる主の声を聞いたので、言った。『ここに、私がおります。私を遣わしてください』」（イザ6：8）

(2) 召命のための準備はすでになされている。

- ①モーセとダビデは、羊飼いであった。
- ②4人の弟子たちは、漁師であった。

「レプラ患者の癒し」

§ 045 マコ 1 : 40~45、マタ 8 : 2~4、ルカ 5 : 12~16

1. はじめに

(1) 前回の箇所、4人の弟子たちが召された。

①2つの癒しの記事が続く。

*レプラ患者の癒し(この癒しは、特別なものである)

*中風の人の癒し

②ともに、メシアの権威を証明する奇跡である。

③宗教的指導者層との対立が激しくなる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

レプラ患者の癒し (§ 45)

マコ 1 : 40~45、マタ 8 : 2~4、ルカ 5 : 12~16

2. 用語についての考察

(1) ギリシア語の「レプラ」の訳語

①かつては、「らい病」と訳されていた。

②英語では、「leprosy」である。

③これらの用語は、医学的には、「ハンセン氏病」と呼ばれるものである。

④しかし、当時のパレスチナには、この病気はなかった。

*これは、慢性の皮膚病であろう。乾癬(かんせん)がその例である。

*織物、編物、皮製品に関する言及もある(レビ 13 章)。

*家の壁に関する言及もある(レビ 14 章)。

⑤「らい病」という用語には、悲しい歴史がある。

*偏見にまみれた言葉である。

*キリスト教界にも、偏見があった。

(2) 反省に立った新しい訳語

①「ツアラアト」(新改訳第3版)

②「重い皮膚病」(新共同訳)

*これ自体、問題を起こす可能性がある。

3. アウトライン(ルカ 5 : 12~16)

(1) 絶望(12節 a)

- (2) 懇願 (12 節 b)
- (3) 癒し (13 節)
- (4) 癒しの結果 (14~16 節)

4. メッセージのゴール

- (1) メシア時代の到来
- (2) 新約時代の到来

このメッセージは、新しい時代の到来について学ぼうとするものである。

I. 絶望 (12 節 a)

「さて、イエスがある町におられたとき、全身ツァラアトの人がいた」

1. この人は、ユダヤ人のレプラ患者である。

- (1) なぜなら彼は、癒しの後、モーセの律法の定めに従っていけにえを捧げている。
 - ①彼は、モーセの律法のもとにいる。

(2) 後で見るが、ユダヤ人のレプラ患者が癒されるのは、これが初めてである。

2. レビ記 13~14 章にツァラアトに関する規定がある (合計 116 節)

「ある人のからだの皮膚にはれもの、あるいはかさぶた、あるいは光る斑点ができ、からだの皮膚にツァラアトの患部が現れたときは、彼を、祭司アロンか、祭司であるその子らのひとりのところに連れて来る。祭司はそのからだの皮膚の患部を調べる。その患部の毛が白く変わり、その患部がそのからだの皮膚よりも深く見えているなら、それはツァラアトの患部である。祭司はそれを調べ、彼を汚れていると宣言する」 (レビ 13 : 2~3)

(1) ツァラアトの判定を下すのは、祭司である。

- ①ツァラアトは、儀式的に汚れている状態にある。
- ②幕屋や神殿に入ることができない。霊的祝福を受ける機会が奪われた。
- ③ツァラアト患者に触れると、その人も汚れた状態になる。
- ④ラビの中には、ツァラアトは罪の結果(象徴)であると強く主張する者もいた。
- ⑤キリスト教会もまた、長年、同様の過ちを犯してきた。
- ⑥しかし聖書は、そこまでは強調していない。
- ⑦モーセの律法の多くは、神の聖さを教えるためのものである。

(2) ツァラアトの判定を受けた者は、絶望状態に陥る。

「患部のあるそのツァラアトの者は、自分の衣服を引き裂き、その髪の毛を乱し、そ

の口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ばなければならない』

(レビ13:45)

- ①その患者は、自分の衣服を引き裂く。
- ②家族や共同体を離れて、隔離された地区に住むようになる。
- ③髪の毛を乱し、目から下の顔の部分を覆う。
- ④歩く時は、「汚れている、汚れている」と叫ぶ。
- ⑤実に悲劇的であるが、目的は、ツアラアトの伝染を防ぐためである。
- ⑥微生物や細菌に関する知識がない時代の規定としては、驚くべきものである。

II. 懇願 (12節b)

「イエスを見ると、ひれ伏してお願いした。『主よ。お心一つで、私をきよくしていただけます』」(12節b)

1. レプラ患者の態度

(1) 彼は、「ひれ伏してお願いした」。

- ①この動作は、旧約的なもの。
- ②神に祈りを捧げる時の姿勢である。

(2) 「主よ」

- ①キュリオス (キュリエ) という呼びかけ。
- ②シモンが同じ呼びかけをした。

「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、『主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから』と言った」(ルカ5:8)

- ③前者はイエスに近づき、後者はイエスから離れていく。
- ④ともに、健全な応答である。

2. レプラの患者の信仰

(1) 訳語の比較

「主よ。お心一つで、私をきよくしていただけます」(新改訳)

「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」(新共同訳)

「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが」(口語訳)

「主よ、御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん」(文語訳)

「お願いでございますっ！ どうぞ私の体を、体をもとどおりにしてください。あなた様のお気持ちひとつで治るのですから」(リビングバイブル)

(2) 彼は、イエスにはツァラアトを癒す力があると信じていた。

①「主よ」という呼びかけの言葉が、それを示している。

(3) しかし、イエスが、実際にそうしてくださるかどうかが確信がなかった。

①愛されたことのない人は、愛を受けることに慣れていない。

②彼は、自分の存在について自問自答したことであろう。

(例話) ユダヤ民族は、愛を示された時、どう振る舞えばよいのか分からない。

(例話) 韓国の孤児院で育った女性の証し。相手に唾を吐く。

Ⅲ. 癒し (13 節)

「イエスは手を伸ばして、彼にさわり、『わたしの心だ。きよくなれ』と言われた。すると、すぐに、そのツァラアトが消えた」

(1) イエスの憐み

①イエスは、ことばを発するだけで癒しを行えた。

②しかし、手を伸ばして、彼にさわった。

③本来は、ツァラアト患者に触れると、汚れるとされた。

④ペテロの姑の癒しの場合も、「手を取って起こされた」とある(マコ1:31)。

⑤「わたしの心だ」と言われた。

(2) イエスの力

①「きよくなれ」は、ギリシア語で一言「καθαρισθητι」。

②即座に癒された。

(3) 魂と肉体の癒し

①ツァラアトの宣告を受けてから、彼は、他人から触れられたことがなかった。

②イエスのことばと行動によって、彼は全人的に癒された。

Ⅳ. 癒しの結果 (14~16 節)

1. 14 節

「イエスは、彼にこう命じられた。『だれにも話してはいけない。ただ祭司のところに行って、自分を見せなさい。そして人々へのあかしのため、モーセが命じたように、あなたのきよめの供え物をしなさい』」

(1) 「だれにも話してはいけない」

- ①群衆が、奇跡にとらわれ過ぎないように。
- ②イエスのメッセージが、正しく理解されるように。

(2) レビ記13章、14章には、レプラから癒された場合の手続きが記録されている。

- ①イエスは、モーセの律法に従ったきよめの手順を指示している。
- ②2羽の生きているきよい小鳥を取り、1羽をほふる。
- ③生きている小鳥を血に浸し、それから野に放す。
- ④小鳥の血を癒された人に、7度振りかける。
- ⑤7日間の厳しい観察の期間が続く。
- ⑥その後、癒されたと宣言される。
- ⑦8日目に、4種類の捧げ物を捧げる。
 - *罪過のためのいけにえ
 - *罪のためのいけにえ
 - *全焼のいけにえ
 - *穀物の捧げ物
- ⑧罪過のためのいけにえの血を取り、それをきよめられる者に塗る。
 - *右の耳たぶ
 - *右手の親指
 - *右足の親指
- ⑨同じ場所に、オリーブ油を塗る。
- ⑩その後、ユダヤ人社会に復帰することができる。

2. 15～16節

「しかし、イエスのうわさは、ますます広まり、多くの人の群れが、話を聞きに、また、病気を直してもらいに集まって来た。しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた」

- (1) イエスの意図通りにはならなかった。
- (2) イエスは、荒野に退いて祈っておられた。
 - ①これは、イエスの日常の習慣であった。

結論

1. メシア時代の到来

- (1) これは、ユダヤ人のツァラアト患者が癒された最初の例である。

①祭司たちは、このために「きよめの供え物」を捧げたことがなかった。

(2) ミリアムの例

「雲が天幕の上から離れ去ると、見よ、ミリアムはツアラアトになり、雪のようになっていた。アロンがミリアムのほうを振り向くと、見よ、彼女はツアラアトに冒されていた」(民12:10)

①この癒しは、モーセの律法が完結する前の出来事である。

(3) ナアマン将軍の例

「そこで、ナアマンは下って行き、神の人の言ったとおりに、ヨルダン川に七たび身を浸した。すると彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった」(2列5:14)

①ナアマンは、シリア人であった。

(4) ユダヤ教では、奇跡は「一般的な奇跡」と「メシア的奇跡」に分類される。

①ツアラアトの癒しは、メシア的奇跡である。

②祭司たちは、それを理解した。

③一般民衆も、それを理解した。

④メシア的奇跡の場合は、通常の反応とは異なる反応が返って来た。

(5) ユダヤ人たちが待ち望んでいたメシア時代が到来したのだ。

(例話) イスラエルに初めて降り立った時

①国家的に危機に際して、預言者たちはメシア的王国を預言した。

②バビロン捕囚以降も、同じである。

③マラキ以降、メシア待望の時代になる。

④バプテスマのヨハネの登場

⑤そして今、民族的期待が成就した。

⑥しかし彼らは、態度を保留にしている。

2. 新約時代の到来

(1) イエスは、モーセの律法に忠実であった。

①パリサイの律法(口伝律法)には反対された。

(2) イエスの死によって、モーセの律法の要求はすべて満たされた。

①しかし、いまだにモーセの律法に支配されているクリスチャンがいる。

(3) 私たちは今、キリストの律法に従って生きている。

「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい」

(ガラ6:2)

(例話) 35年間、アメリカに不法入国を繰り返したメキシコ人

- ①愛の律法
- ②聖霊の律法
- ③「聖霊に満たされよ」

「罪を赦す権威」

§046 マコ2:1~12、マタ9:1~8、ルカ5:17~26

1. はじめに

(1) 2つの癒しの記事が続く。

- ①レプラ患者の癒し (この癒しは、メシア的癒しである)
- ②中風の人癒し (罪を赦す権威)
- ③その結果、宗教的指導者層との対立が激しくなる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

罪を赦す権威 (§46)

マコ2:1~12、マタ9:1~8、ルカ5:17~26

(3) この箇所は、ユダヤ的視点から読み解く必要がある。

- ①今まで見えなかった新しい視点が見えてくる。

2. メシア運動の評価のプロセス (3段階)

(1) 観察の段階

- ①メシア運動の可能性があると判断した場合に、評価のプロセスが始まる。
- ②第1の段階では、沈黙して目の前に起こっている事象を観察するだけ。
- ③メシア運動ではないと判断した場合は、ここで終わる。

(2) 審問の段階

- ①メシア運動の可能性ありと判断した場合は、第2の段階に進む。
- ②第2の段階では、種々の質問を投げかける。

(3) 評価の段階

- ①最後に、メシア運動であるかどうかを、宣言する。

3. アウトライン (ルカ5:17~26)

- (1) 起: イエスと宗教的指導者の対立 (17節)
- (2) 承: イエスからの挑戦 (18~20節)
- (3) 転: 宗教的指導者たちの反撃 (21節)
- (4) 結: イエスの勝利 (22~26節)

4. メッセージのゴール

- (1) 信仰の力
- (2) 罪と病の関係
- (3) 赦しの力

このメッセージは、ユダヤ的視点から、中風の人の癒しについて学ぼうとするものである。

I. 起：イエスと宗教的指導者の対立 (17節)

1. 17節 a

「ある日のこと、イエスが教えておられると、パリサイ人と律法の教師たちも、そこにすわっていた。彼らは、ガリラヤとユダヤとのすべての村々や、エルサレムから来ていた」

(1) レプラ患者の癒しから、しばらく経った時期である。

- ①この癒しはメシア的癒しであった。
- ②その影響が、ここに見られる。

(2) 場所は、カペナウムのペテロの家であろう。

「数日たって、イエスがカペナウムにまた来られると、家におられることが知れ渡った」(マコ2:1)

(3) イエスが教えておられる場所に、宗教的指導者たちがいた。

- ①パリサイ人
- ②律法の教師たち(律法学者)
- ③彼らは、「ガリラヤとユダヤとのすべての村々」から来ていた。
- ④また、「エルサレム」からも来ていた。
- ⑤これは、単なる田舎教師の集まりではない。
- ⑥メシア運動の「観察の段階」が始まっていた。
- ⑦彼らは、公式の審問団である。

2. 17節 b

「イエスは、主の御力をもって、病気を直しておられた」

(1) 「主の御力をもって」

- ①「キュリオスから来る癒しの力」である。
- ②これは、聖霊の力とイコールである。

(2) イエスは、ナザレの会堂で、イザ61:1を朗読された。

「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油をそそがれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、」
(ルカ4:18)

(3)「病気を直しておられた」

①これから起こることのために、読者を準備する言葉である。

3. この家の中に、不穏な空気が流れていることを見過ごしてはならない。

II. 承：イエスからの挑戦 (18～20節)

1. 18節

「するとそこに、男たちが、中風をわずらっている人を、床のままで運んで来た。そして、何とかして家の中に運び込み、イエスの前に置こうとしていた」

(1) マコ2:2～3の情報

「それで多くの人が集まったため、戸口のところまですきまもないほどになった。この人たちに、イエスはみことばを話しておられた。そのとき、ひとりの中風の人が四人の人にかつがれて、みもとに連れて来られた」

(2) 家には人が一杯いた。

①この地方で発掘された家のサイズは、最大でも一辺が3間(5.4メートル)。

②面積は、9坪(18畳)である。

③立った状態で、50人位が最大の収容人数であろう。

(4) 中風の人を運んできたのは、4人の男であった。

①脳溢血の後遺症で、体の一部、あるいは、全部を動かすことができない状態。

②4人は、家族か、友人か。

2. 19節

「しかし、大ぜい人がいて、どうしても病人を運び込む方法が見つからないので、屋上に上って屋根の瓦をはがし、そこから彼の寝床を、ちょうど人々の真ん中のイエスの前に、つり降ろした」

(1) 余りにも混雑しているので、イエスに近づくことができなかった。

①普通なら諦めて帰る状況である。

(2) 奇抜な発想

- ①「屋上に上って屋根の瓦をはがし」
- ②「そこから彼の寝床を、ちょうど人々の真ん中のイエスの前に、つり降ろした」

(3) パレスチナの家

- ①平屋建て
- ②屋根の上に人が乗っても平気なくらいに頑丈であった。
- ③屋根の構造
 - * 梁を渡し、その上にいかだ状の木枠を乗せる。
 - * さらに、木の枝や、木の葉で覆う。
 - * 最後に、糞を混ぜた粘土を乗せ、それを平らに延ばす。
 - * 乾燥すると、強固な屋根になった。
- ④建物の壁に階段が取り付けられおり、そこから屋根に上ることができた。
- ⑤ルカの福音書では、「**屋根の瓦**」となっている。
 - * タイルのことである。
 - * 当時、異邦人の建築様式の影響を受けた家があった。

3. 20 節

「彼らの信仰を見て、イエスは『友よ、あなたの罪は赦されました』と言われた」(新改訳)

「イエスはその人たちの信仰を見て、『人よ、あなたの罪は赦された』と言われた」(新共同訳)

「イエスは彼らの信仰を見て、『人よ、あなたの罪はゆるされた』と言われた」(口語訳)

「イエスはこれほどまでの信仰を見て、病人に、『あなたの罪は赦されました』と宣言なさいました」(リビングバイブル)

- (1) マルコとマタイでは、「子よ」という呼びかけになっている。
 - ①イエスの親愛な態度が表現されている。
 - ②「**彼らの信仰を見て**」とは、4人と中風の人。
- (2) イエスは、先ず罪の赦しを宣言された。
 - ①この順番が重要である。
 - ②パリサイ人や律法学者の観察の目を意識してのことである。
 - ③イエスは、ご自分には罪を赦す権威があることを示された。
 - ④後に、そのことを肉体的な癒しを行うことによって証明される。

Ⅲ. 転：宗教的指導者たちの反撃 (21 節)

1. 21 節

「ところが、律法学者、パリサイ人たちは、理屈を言い始めた。『神をけがすことを言うこの人は、いったい何者だ。神のほかに、だれが罪を赦すことができよう』」

(1) 彼らはまだ発言することを許されていない。

①マコ2:6

「ところが、その場に律法学者が数人すわっていて、心の中で理屈を言った」

②マタ9:3

「すると、律法学者たちは、心の中で、『この人は神をけがしている』と言った」

(2) 彼らの神学は正しい。

①神のほかに、罪を赦すことのできる者はいない。

②彼らのイエスに対する認識が間違っている。

2. 22～23 節

「その理屈を見抜いておられたイエスは、彼らに言われた。『なぜ、心の中でそんな理屈を言っているのか。『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらがやさしいか』」

(1) イエスは、彼らの心の中を見抜いておられた。

①彼らの心は怒りで煮えくり返っていた。

(2) ラビ的教授法：質問には質問で。

①生徒に考えさせ、自分で正しい結論を導き出せるように指導する。

(2) 質問の内容

「あなたの罪は赦された」と言うのと、「起きて歩け」と言うのと、どちらがやさしいか。

①「あなたの罪は赦された」という方が簡単である。言い放題。

②「起きて歩け」という方が難しい。結果は明白である。

Ⅳ. 結：イエスの勝利 (24～26 節)

1. 24 節

『人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに悟らせるために』と言って、中風の人に、『あなたに命じる。起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい』と言われた』

(1) ラビ的教授法：Kal Vahomer (Light and heavy) (カル・バ・ホメル)

- ①「軽いものから重いものへ」という意味
- ②より難しいことをすることによって、易しいことを証明する。
- ③ここでの「軽いもの」とは、罪の赦し。
- ④ここでの「重いもの」とは、肉体の癒し。

(2) イエスは、「寝床をたたんで、家に帰りなさい」と命じた。

- ①より重いものを命じた。
- ②それによって、罪の赦しが本当であることを証明しようとした。

2. 25～26節

「すると彼は、たちどころに人々の前で立ち上がり、寝ていた床をたたんで、神をあがめながら自分の家に帰った。人々はみな、ひどく驚き、神をあがめ、恐れに満たされて、『私たちは、きょう、驚くべきことを見た』と言った』

(1) イスラエルはイエスをメシアとして受け入れるかどうかの岐路に立たされた。

- ①指導者たちは、エルサレムに戻り、イエスの主張は吟味に値すると報告した。
- ②この時点から、第2の段階（審問の段階）に入っていく。

(2) §47～60まで、イエスは常にパリサイ人たちの監視下に置かれる。

- ①彼らは常に、イエスに論争を吹きかける。
- ②§61で、彼らはイエスを拒否する（ベルゼブル論争）。

結論

1. 信仰の力

- (1) 信仰とは、愛である。
- (2) 愛とは、相手の最善を願うことである。
- (3) 信仰とは、困難な状況に直面した時に、斬新なアイデアを産み出す力である。
- (4) 4人の男たちは、常識外れの行為をすることを恐れていなかった。
- (5) アイデアは、縛られていない。

2. 罪と病の関係

- (1) 罪の赦し、そして、病の癒しという順序が大切。

- ①指導者たちを意識した順序である。
 - ②と同時に、イエスは、病の原因に手を置かれたともいえる。
- (2) 罪責感が原因となっている病がある。

3. 赦しの力

(1) 「あなたの罪は赦されました」ということばは、イエスの神性を示している。

- ①イエスだけが、罪を赦す権威を持っている。
- ②それは、個人的な関係で、相手に対して、赦しを宣言することとは異なる。

(2) 私たちもまた、「汝の罪、赦されたり」と宣言することがある。

- ①私たちの場合は、キリストにあつて罪の赦しを宣言するのである。

(例話) デューク大学心理学部の部長 ビル・ウィルソン

ベトナム戦争から帰還した兵士に、語りかけた。

「私には、イエス・キリストを通して、『あなたの罪は赦された』と言う権威がある」
その日から、彼の回復が始まった。

- (3) 誰に向かってでも、罪の赦しを宣言することができる。
- ①それを受け取るかどうかは、その人の信仰にかかっている。

4. 雑感

(1) 日本を支配する強大な権威

- ①中空構造の権威
- ②福音の前に立ちはだかる壁

(2) クリスチャンの使命

- ①自分がメシア的奇跡となる。
- ②人々の心をキリストに向けさせる。

(3) 人生は終息に向かうが、最後まで使命が与えられている。

「マタイの召命」

§ 047 マコ 2 : 13~17、**マタ 9 : 9~13**、ルカ 5 : 27~32

1. はじめに

(1) 2つの癒しの記事があった。

- ①レプラ患者の癒し (この癒しは、メシア的癒しである)
- ②中風の人癒し (罪を赦す権威)
- ③この箇所から、メシア運動に対する審問の段階が始まる。

(2) **A. T. ロバートソンの調和表**

マタイの召命とイエスを歓迎する食事会 (§ 47)

マコ 2 : 13~17、マタ 9 : 9~13、ルカ 5 : 27~32

(3) この箇所、マタイが第7番目の弟子として召されている。

- ①ペテロとアンデレ (漁師)
- ②ヤコブとヨハネ (漁師)
- ③ピリポとナタナエル
- ④そして、マタイ (レビとも呼ばれていた)

*マタイ自身がメシア的奇跡となった。

*そこで、彼の友人たちがイエスに興味を示し始める。

2. アウトライン (マタ 9 : 9~13)

- (1) 古いマタイ (9節)
- (2) 新しいマタイ (10節)
- (3) 立ち上がる壁 (11~13節)

3. メッセージのゴール

- (1) イエスの招き
- (2) 招きへの応答

このメッセージは、マタイの召命から、教訓を学ぼうとするものである。

I. 古いマタイ (9節 a)

「イエスは、そこを去って道を通りながら、収税所にすわっているマタイという人をご覧になって、」

1. 中風の人の癒しの出来事の、直後である。
 - (1) 場所は、カペナウムである。

2. マタイという人が収税所にすわっていた。
 - (1) マタイは、いわゆる取税人であった。
 - ①英語で「publican」という。ラテン語の「publicanus」からの借用語。
 - ②本来の意味は、公の職務に就く者という意味である。

 - (2) 同胞のユダヤ人たちから憎まれていた。
 - ①現代の税務署職員とは異なる。

3. 取税人の背景
 - (1) ユダヤ教の口伝律法では、取税人になることは禁じられていた。
 - ①取税人の職は、入札で最高額を入れた者に与えられた。
 - ②取税人の仕事は、ローマ帝国の代理人として、税や罰金を徴収すること。
 - ③この仕事は、大きな利益をもたらすものであった。
 - * 民衆から集めた額と、ローマに納める額との差額が、収入になった。
 - * ローマ帝国は、その習慣を認めていた。

 - (2) ユダヤ人たちが取税人を憎んだ理由
 - ①取税人は、ユダヤ人たちを抑圧しているローマ帝国に加担していた。
 - ②取税人は、同胞から金を盗むことによって豊かになっていた。

 - (3) ユダヤ教の指導者たちは、取税人との交わりを禁止した。
 - ①例外は、取税人同志の交わり。
 - ②罪人との交わり。罪人とは、遊女(娼婦)の婉曲語である。

 - (4) 取税人には、2種類あった。
 - ①所得税を徴収する取税人
 - ②通行税を徴収する取税人
 - * 後者の方が、評判が悪い。
 - * より多くのものをだまし取れるから。
 - * ラビたちは、一般的には正直であることを奨励した。
 - * しかし、取税人にだけは嘘を言ってもいいことになっていた。

*取税人は、盗人であるとされた。

(5) マタイは、通行税を徴収する取税人であった。

「収税所にすわっているマタイという人」

- ①彼は、最悪の取税人であった。
- ②ヘロデの領地の外に出て行く舟から徴税した。
- ③ダマスコからエジプトに向かう商人たちから徴税した。

* ヴィア・マリスは、キャラバン隊のルートになっていた。

- ④マタイは、富のために、名声も家族も祖国も捨てた人物である。

II. 新しいマタイ (9b~10節)

1. 9節b

「『わたしについて来なさい』と言われた。すると彼は立ち上がって、イエスに従った」

(1) 訳文の比較

「わたしについて来なさい」 (新改訳)

「わたしに従いなさい」 (新共同訳)

「わたしに従ってきなさい」 (口語訳)

「我に従へ」 (文語訳)

「来なさい。 わたしの弟子になりなさい」 (リビングバイブル)

(2) マタイは、イエスの権威を認識した。

- ①突然起こったことではない。
- ②収税所は、情報の収集センターのようなものである。
- ③イエスの教え、奇跡、風貌に深い感銘を受けていた。

(3) これは、徹底的な従順である。

①ルカ 5 : 28

「するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った」

②マタイの福音書には、「何もかも捨て」という言葉はない。

「自分の口ではなく、ほかの者にあなたをほめさせよ。自分のくちびるではなく、よその人によって」 (箴 27 : 2)

2. 10節

「イエスが家で食事の席に着いておられるとき、見よ、取税人や罪人が大ぜい来て、イエ

スやその弟子たちと一しょに食卓に着いていた」

(1) それからしばらくして、マタイは自宅で「誕生会」を開いた。

- ①霊的新生を感謝する会である。
- ②古いマタイには考えられないような、気前のよいことが起こっている。
- ③彼自身が、メシア的奇跡になっている。

(2) 招かれた客

- ①主賓は、イエス。
- ②次席は、イエスの弟子たち6人。
- ③それ以外の招待客
 - *取税人
 - *罪人(娼婦)
- ④そして、その外側に群衆やパリサイ人たちがいた。

(3) 「一しょに食卓に着いていた」

- ①ギリシア語で、「スン-アナケイミ」である。
- ②肘をついて体を横たえるという意味。

(4) ユダヤ的視点では、食事をともにすることは、親密な交わりを意味する。

①黙3:20

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」

(5) ここには、私たちへの教訓がある。

- ①外向き志向の集会、礼拝の重要性。

Ⅲ. 立ちはだかる壁 (11~13節)

1. 11節

「すると、これを見たパリサイ人たちが、イエスの弟子たちに言った。『なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人と一しょに食事をするのですか?』」

(1) 彼らは、審問の段階に入っているので、疑問をぶつける。

- ①直接イエスにではなく、弟子たちに言った。

(2) 彼らの理解では、イエスは不法なことを行っている。

- ①裕福な者が、高名なラビを食事に招待することは、ほむべきことであった。
- ②しかし、マタイは取税人仲間と遊女しか招いていない。
- ③そのような場にイエスが同席していることは、理解できない。
- ④もしイエスがメシアであるなら、このような者たちと交わらないはずである。

(3) 詩1:1

「幸いなことよ。悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人」

2. 12節

「イエスはこれ聞いて言われた。『医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です』」

(1) 取税人や遊女は、助けを必要としている人々である。

- ①彼らは、道徳的な意味で病人である。
- ②イエスは、彼らを癒す医者である。

(2) パリサイ人たちは、不遜にも、自分たちは霊的に健康であると考えていた。

- ①霊的癒しを必要としていない。
- ②従って、医者が必要ではない。

3. 13節

『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」

(1) イエスは、パリサイ人たちの霊的状态を非難された。

- ①彼らは、内面(あわれみ)よりも外面(いけにえのようなもの)にこだわった。

(2) 「行って学んで来なさい」

- ①生徒を真理に導くための決まり文句 (Go and learn.)
- ②「来て、見なさい」 (Come and see) と同じ意味である。

(3) イエスが示したのは、ホセ6:6である。

「わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることを喜ぶ」

- ①いけにえの否定ではない。
- ②神は、いけにえ以上に、真実な信仰、誠実、あわれみを喜ばれる。

- ③律法を守っているとの自信を持った人たちへの、皮肉に満ちた命令である。
- (4)「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」
- ①このことばは、マタイの人生に成就した。
 - ②パリサイ人たちの問題点は、自分が義人だと思っていること。
 - ③自分は罪人だという認識がなければ、イエスの招きの声を聴くことは難しい
 - ④イエスが人々を2分するとは、このことである。

結論

1. イエスの招き

(1) 権威ある招き

- ①マタイが従っていた権威とは：
- * 宗教的指導者たちの権威に従っていた時があった。
 - * しかし、今はローマ帝国の権威に従っている。
 - * 彼は、富に仕えていた。
- ②マタイは、イエスの権威がいかなる地上の権威よりも上にあることを認めた。
- * 実存的なイエスとの出会い。
- (例話) 犬のしつけ
- * 犬が主導の散歩をよく見る。
 - ・ 引っ張り癖、拾い食い、マーキング
 - * 飼い主がリーダーになる必要がある。
 - ・ 犬にとって最も幸せな状態である。
 - ・ リーダーウォークの重要性

(2) 恵みに満ちた招き

- ①取税人が招かれることは、奇跡的なことである。

(3) 愛に満ちた招き

- ①マタイは、神の愛の中に招かれたのである。
- (例話) メッセージの「あいうえお」(32回目「悪霊に対する権威」)

2. 招きへの応答

(1) 信仰による決断

- ①収税所を去ると、2度との取税人には戻れない。

- ② 収税所そのものは、依然として活動を継続する。
- ③ 犠牲を伴う決断であった。

(2) 賜物を生かす人生

- ① 彼の人生は、搾取から奉仕の人生に変えられた。
- ② 取税人としての経験が生きたことであろう。
- ③ しかし、彼は言葉数の多い人ではない。
 - * 福音書の中で、彼がイエスに質問したという記録はない。
- ④ その彼が、マタイの福音書を書き残した。
 - * これは、ユダヤ人に向けて書かれた福音書である。
- ⑤ ここに、神の大いなる「どんでん返し」(アイロニー)がある。
- ⑥ 私たちも、神の「どんでん返し」になろうではないか。

「断食論争」

§ 048 マコ 2 : 18~22、マタ 9 : 14~17、ルカ 5 : 33~39

1. はじめに

(1) メシア運動を吟味する3つの段階

- ①観察
- ②審問
- ③決定

(2) 前回の「罪を赦す権威」の箇所を境に、審問の段階に入る。

- ①この時期、イエスは公生涯の重要な時期に入っていた。
- ②パリサイ人たちとの論争が始まる。
- ③テーマは、口伝律法に関するものである。
- ④パリサイのユダヤ教は、口伝律法に聖書と同等か、それ以上の権威を認めた。
- ⑤口伝律法は、人々の生活を束縛していた。

(例話) 感謝祭(11月第4木曜日)での食前の祈り

(3) A. T. ロバートソンの調和表

イエスは、3つのたとえ話を用いて、弟子たちを弁護する。(§ 48)

マコ 2 : 18~22、マタ 9 : 14~17、ルカ 5 : 33~39

2. アウトライン (ルカ 5 : 33~39)

(1) 断食に関する質問

- ①誰が質問をしたのか(Who)。
- ②断食とは何か(What)。
- ③なぜ質問をしたのか(Why)。

(2) 4つのたとえ話による回答

- ①花婿の友人のたとえ
- ②新しい着物と古い着物のたとえ
- ③ぶどう酒と皮袋のたとえ
- ④古いぶどう酒のたとえ

3. メッセージのゴール

(1) 新約とパリサイ的ユダヤ教の関係

- (2) クリスチャンの特権
- (3) ロマ書7章と8章

このメッセージは、クリスチャン生活の特権について学ぼうとするものである。

I. 断食に関する質問

1. 誰が質問をしたのか (Who)。

「彼らはイエスに言った。『ヨハネの弟子たちは、よく断食をしており、祈りもしています。また、パリサイ人の弟子たちも同じなのに、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています』(33節)

(1) 恐らくマタイが、ユダヤ教が教える断食日に宴会を開いたのであろう。

- ①イエスとその弟子たちが招かれた。
- ②非常に楽しい雰囲気での宴会であった。

(2) マコ2:18

「ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは断食をしていた。そして、イエスのもとに来て言った。『ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たちは断食するのに、あなたの弟子たちはなぜ断食しないのですか』」

- ①審問の段階に入っている。
- ②質問したのは、ヨハネの弟子たちとパリサイ人たち。
- ③両者はともに、古い時代に属していた。

2. 断食とは何か (What)。

(1) 旧約聖書が命じる断食の日は、たった1日である。

- ①贖罪の日だけである。

(2) 捕囚期以降、自発的に4回の断食が加わる。

- ①ゼカ8:19

「万軍の【主】はこう仰せられる。『第四の月の断食、第五の月の断食、第七の月の断食、第十の月の断食は、ユダの家にとっては、楽しみとなり、喜びとなり、うれしい例祭となる。だから、真実と平和を愛せよ』」

- ②【主】は、断食をするかどうかにかかわらずおられない。
- ③メシア的王国の約束を信じて、真実と平和を求めよという命令が下った。

(3) イエス時代になると、パリサイ人たちは、週に2回断食をした。

- ①水さえ飲まない断食である。
- ②月曜と木曜に断食をした。
- ③師は、弟子たちの行動に責任を持つ。

3. なぜ質問をしたのか (Why)。

はじめに

- ①紀元1Cのユダヤ教では、口伝律法が聖書以上に権威を持つようになっていた。
- ②イエスとパリサイ人の論争は、この口伝律法に関するものである。
- ③パリサイ人たちは、イエスもまた口伝律法に従うことを期待した。

(1) ソフリム学派 (前450年～前30年)

- ①捕囚から帰還した時期の律法学者エズラの活躍
 - *彼がソフリム学派を設立した。
 - *ソフリムとは、書記(律法学者)のことである。
 - *目的は、モーセの律法を教え、再び捕囚が起こらないようにするため。
- ②モーセの律法は、613の命令から成る。
 - *その周りに「垣根」を作れば、民は律法違反の罪を犯すことがなくなる。
 - *その「垣根」が、ラビ的律法である。
 - *過半数が賛成した時に、それは、全世界のユダヤ人が守るべき律法となる。
- ③「子やぎを、その母親の乳で煮てはならない」(出23:19、34:26、申14:21)
 - *カナン人たちは、初子のやぎを母の乳で煮て、バアルに捧げていた。
 - *この命令は、カナン人の偶像礼拝からイスラエルの民を守るものとなった。
 - *前1400年ごろの律法の目的が、前400年ごろには忘れ去られていた。
 - *その結果、肉と乳製品を分けて食べるべきだという律法ができた。
 - *これが、今日食物規定(コシェル規定)の中心である。

(2) タナイム学派 (前30年～220年)

- ①第2の学派である。
 - *タナイムとは、教師のことである。
- ②彼らは、ソフリム学派の律法を、聖書と同等か、それ以上のものと見なした。
- ③220年までは、すべてが口伝律法であった。
- ④彼らは、神はモーセに2種類の律法を与えたと教えた。
 - *成文法(613の律法)
 - *口伝律法
- ⑤今日のユダヤ教も、この考え方を踏襲している。

- ⑥口伝律法を暗記している人たちを、律法学者という。
 - *イエスの時代、口伝律法は完成途上にあった。
 - *メシアは、口伝律法に従うはずだという期待があった。
 - *しかしイエスは、一貫して口伝律法に反対した。
 - *バプテスマのヨハネの弟子たちは、口伝律法の断食の教えに従っていた。
- ⑦紀元300年ごろに、ユダ・ハナシの命令によって、口伝律法が文字化された。
 - *約650年にわたるラビ的律法が、成文法となった。
- ⑧ソフリム学派とタナイルム学派の口伝律法をミシュナという。
 - *ミシュナは、ヘブル語で約1500ページである。

(3) アモライム学派(紀元220年～500年)

- ①アモライムとは、アラム語で教師という意味である。
- ②アモライム学派は、ゲマラという注解書を残した。
 - *ゲマラは、百科事典のブリタニカほどのサイズがある。
- ③タルムード
 - *ミシュナ+ゲマラ=タルムード
 - *口伝律法、パリサイ的律法=ミシュナ

II. 4つのたとえ話による回答

1. 花婿の友人のたとえ

「イエスは彼らに言われた。『花婿がいっしょにいるのに、花婿につき添う友だちに断食させることが、あなたがたにできますか。しかし、やがてその時が来て、花婿が取り去られたら、その日には彼らは断食します』(34～35節)

(1) 結婚式に行くのは、ごちそうに与るためであって、断食するためではない。

- ①ユダヤの婚礼は、7日間続いた。
- ②その間、断食、喪に服す行為、重労働などは禁じられた。

(2) しかし、イエスが去ってからは、彼らは断食するようになる。

- ①十字架の預言がここにある。

2. 新しい着物と古い着物のたとえ

「イエスはまた一つのたとえを彼らに話された。『だれも、新しい着物から布切れを引き裂いて、古い着物に継ぎをするようなことはしません。そんなことをすれば、その新しい着物を裂くことになるし、また新しいのを引き裂いた継ぎ切れも、古い物には合わないのです』(36節)

(1) 新しい布切れは、洗うと縮む。

- ①新しい布切れを古い着物に縫い付けることはしない。
- ②それをすると、新しい着物も、古い着物も、ともにだめになる。

3. ぶどう酒と皮袋のたとえ

「また、だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒は流れ出て、皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れなければなりません」(37～38節)

(1) 当時は、ぶどう酒は皮袋に入れて、ロバやラクダに乗せて運んだ。

(2) 古い革袋は、長く使用されて、伸びきっている。

- ①そこに新しいぶどう酒を入れたなら、発酵力が強いので、皮袋は破裂する。
- ②新しい革袋の場合は、弾力性に富むので、持ちこたえることができる。

4. 古いぶどう酒のたとえ

「また、だれでも古いぶどう酒を飲んでから、新しい物を望みはしません。『古い物は良い』と言うのです」(39節)

(1) ぶどう酒は、古いものほど良い味がある。

①ここでの「古いぶどう酒」は、2つの解釈が可能である。

(2) それは、パリサイ的ユダヤ教のことである。

①パリサイ人たちは、パリサイ的ユダヤ教を好み、イエスの教えを拒否する。

(3) それは、モーセの律法を正しく解釈するユダヤ教のことである。

- ①その場合は、パリサイ的ユダヤ教が新しいぶどう酒となる。
- ②イエスがメシアであるという教えは、古いぶどう酒である。
- ③イエスの弟子たちが味わっているのは、よい味のぶどう酒である。
- ④その彼らに、新しいぶどう酒(パリサイ的ユダヤ教)を強要すべきではない。

結論

1. 新約とパリサイ的ユダヤ教の関係

はじめに

- ①4つのたとえ話は、すべて新約とパリサイ的ユダヤ教の関係を論じたもの。
- ②両者を合体させたり、調和させたりすることは不可能である。

(1) 花婿とは、イエスのことである。

①メシアが到来した今は、婚礼の時である。

(2) 新約は、新しい着物である。

①これをもって、パリサイ的ユダヤ教の繕いをする事は不可能である。

②新約は、それ全体が新しい着物である。

③イエスの教えは、新しい着物である。

④エレ31:31~37に新約の預言がある。

(3) 新約は、新しいぶどう酒である。

①パリサイ的ユダヤ教は、古いぶどう酒である。

②新約は、パリサイ的ユダヤ教の中には収まり切らない。

(4) 新約は、実は古いぶどう酒でもある。

①イエスは、モーセの律法の正しい解釈を教えるために来られた。

②イエスは、モーセの律法の成就として来られた。

2. クリスチャンの責務と特権

(例話) Dr. John Mason Good (May 25, 1764 – January 2, 1827)

著名な英国人の学者(薬学、宗教、自然科学) 「The book of nature」

「私は、クリスチャンの義務や教理を守ってきたが、特権に関しては、十分に体験してこなかった」

(1) イエスは、ご自分の働きの期間を、婚礼の期間にたとえたのである。

①最初のしるしは、カナの婚礼で起こった。

②荒野での40日間の断食以外に、イエスが断食をしたという記録はない。

3. ロマ書7章と8章

(1) 律法に束縛されたクリスチャン生活(ロマ書7章クリスチャン)

(2) 聖霊に導かれたクリスチャン生活(ロマ書8章クリスチャン)

「ベテスダの池での癒し(1)」

§ 049 ヨハ5:1~18

1. はじめに

(1) 前回は、断食論争について学んだ。

- ①口伝律法の本質
- ②イエスの口伝律法に対する態度

(2) 今回は、安息日論争が主要テーマである。

- ① § 49~51 まで、安息日論争が続く。
- ②エルサレムとガリラヤにおいて、パリサイ人たちはイエスに論争を挑む。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

イエスは、安息日に病人を癒し、パリサイ人たちに対して自らの行動を弁護する。

(§ 49)

ヨハ5:1~47 (今回は、5:1~18を取り上げる)

2. 安息日について

(1) 出20:8~11

「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。しかし七日目は、あなたの神、【主】の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。——あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も——それは【主】が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にあるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、【主】は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された」

- ①安息日は、休息の日である。
- ②安息日は、【主】に感謝する日である。
- ③安息日は、自由の民となったことを記念する日である。

(2) 口伝律法による安息日の理解

- ①イエス時代になると、安息日の規定が1500以上も存在するようになった。
- ②ソフリム学派の教え

「神は、なぜイスラエルを創造したのか」

「それは、イスラエルに安息日を守らせるためである」

③安息日は、ユダヤ教の初期の段階で、擬人法化された。

*安息日は、「ヤハウエの女王」であり、「イスラエルの花嫁」である。

*金曜の夕、会堂の扉を開けて、女王である安息日を迎える歌を歌った。

④イエス時代のパリサイ人の教え

「すべてのユダヤ人が一回でも安息日を完全に守ったなら、メシアが来られる」

3. アウトライン (ヨハ5:1~18)

- (1) 絶望的な状況 (1~5 節)
- (2) 神の恵みの侵入 (6~9 節 a)
- (3) 恵みへの反発 (9b~15 節)
- (4) 反発への回答 (16~18 節)

4. メッセージのゴール

- (1) パリサイ人たちの問題点とは何か。
- (2) ご利益信仰の限界とは何か。
- (3) ヨハ5章の病人とヨハ9章の盲人の違いは何か。

このメッセージは、イエスの業と主張について考えようとするものである。

I. 絶望的な状況 (1~5 節)

1. 時

「その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた」(1 節)

(1) 「ユダヤ人の祭り」とは何か。

①「ユダヤでの祭り」と訳すべきである。

②祭りの名前が出ていないので、学者の間で論争がある。

(2) 過越の祭りであろう。

①イエスの公生涯を3年半と考える根拠は、4回の過越の祭りの存在である。

②ヨハ2:13、5:1、6:4、12:1

③ヨハネの福音書では、安息日と過越の祭りが、密接な関係を持つ。

*ヨハ19:31

(3) 安息日の優位性

①レビ記23章は、【主】の7つの例祭について記している。

②その冒頭に、安息日の規定が置かれている。

③ヨハネは、安息日の優位性について深く理解していた。

2. 場所

「さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があって、五つの回廊がついていた」(2節)

(1) 「羊の門」

- ①エルサレムの北東にある門
- ②この門から、いけにえの羊を運び入れたので、この名が付いた。

(2) 「ベテスダと呼ばれる池」

- ①現在の聖アンナ教会の下にある池
- ②縦約90メートル、横約66メートル(約50メートル)

(3) 「五つの回廊」

- ①4辺+中央の仕切り

3. 状況

「その中に大ぜいの病人、盲人、足のなえた者、やせ衰えた者たちが伏せっていた。そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた」(3、5節)

(1) 4節は、後代に付加されたものである。

- ①水の動きと癒しが関連付けられている。
- ②古代には、癒しの宮(神殿)というものが多く存在していた。
- ③代表的なものは、アスクレピウス(アポロの息子)の神殿である。
- ④癒しの宮の特徴は、隣接する泉や湧き水で身を清めることが要求されること。
- ⑤この箇所では、イエスがそれ以上の方であることが証明される。

(2) 多くの肉体的癒しを待つ人々がそこに伏せっていた。

- ①彼らは、水が動くのを待っていたのである。
- ②恐らく、間欠泉であろう。

(3) 「三十八年もの間、病気にかかっている人」

- ①イスラエルの荒野の放浪期間にほぼ等しい。
- ②当時の平均寿命以上の年数である。
- ③古代の癒し物語は、病気の年数を記すことで、癒しの素晴らしさを表現した。

II. 神の恵みの侵入 (6~9節 a)

1. イエスからの一方的な語りかけ

「イエスは彼が伏せっているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。『よくなりたいか』(6節)

(1) イエスは、最も悲惨な人を選んだのであろう。

- ①イエスの目がその人に注がれた。
- ②イエスは、群衆の中にいる個人に目を留められる。

*ニコデモ

*サマリヤの女

(2) イエスの知識

- ①超自然的なものなのか。
- ②観察によるものなのか。
- ③あるいは、噂を聞いたのか。

(3) なぜ「よくなりたいか」と質問したのか。

- ①病人は、回復への意欲を失うことがある。
- ②さらに、病気の状態に逃げ込むこともある。
- ③この質問には、病人に希望の灯をともし力がある。

2. 病人の回答

「病人は答えた。『主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです』(7節)

(1) この回答は、彼の心の状態を映し出すものである。

- ①彼は、「イエス」、「ノー」で答えていない。
- ②癒されない理由を述べている。
- ③他者への批判の言葉である。
- ④責任転嫁が彼の習い性になっていた。

3. イエスの命令

「イエスは彼に言われた。『起きて、床を取り上げて歩きなさい』(8節)

(1) イエスは、自分で行動を起こすように命じた。

- ①イエスの癒しは、肉体の癒しだけでなく、内面の癒しも含む。

(2) ここでは、癒しを受ける側の信仰は問われていない。

①公生涯の後半に入ると、信仰が癒しの条件になってくる。

4. イエスのことばの力

「すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した」(9節 a)

(1) 神のことばに従うなら、神はそのことばを通して働かれる。

(2) この癒しは、イエスのメシア性を証明する奇跡である。

①イザ 35 : 1~7 参照

III. 恵みへの反発 (9b~15節)

1. ユダヤ人たちの反発

「ところが、その日は安息日であった。そこでユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った。『きょうは安息日だ。床を取り上げてはいけない』」(9b~10節)

(1) ユダヤ人たちとは、宗教的指導者たちのこと。

①反発の理由は、その人が安息日の規定に違反したから。

②彼らは、イエスにではなく、その人に反発している。

(2) 彼は、安息日に床を取り上げて歩いた。

①安息日に、物のある領域から別の領域に運ぶことは禁じられていた。

*公の場から私的場へ、私的場から公の場へ

*この場合は、私的場から公の場に運ばれた。

②特に、床を運ぶことは厳しく禁じられた。

(3) この人は、死の危険に直面した。

2. 言い逃れの言葉

「しかし、その人は彼らに答えた。『私を直してくださった方が、「床を取り上げて歩け」と言われたのです』」(11節)

(1) 自分を癒してくれた方に、責任をなすりつけている。

3. 無知の露見

「彼らは尋ねた。『「取り上げて歩け」と言った人はだれだ』。しかし、いやされた人は、それがだれであるか知らなかった。人が大ぜいそこにいる間に、イエスは立ち去られたか

らである」(12～13節)

- (1) この人は、イエスに関する知識が全くない。
 - ①この癒しは、一方的な恵みによるものである。
 - ②肉体の癒しの段階で留まっており、魂の癒しは起こっていない。

4. 罪人を捜すイエス

「その後、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた。『見なさい。あなたはよくなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるから』。その人は行って、ユダヤ人たちに、自分を直してくれた方はイエスだと告げた」(14～15節)

- (1) イエスがこの人を見つけてくださった。
 - ①魂の癒しを与えようとするイエス

- (2) 「見なさい。あなたはよくなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるから」
 - ①「罪を犯し続けてはなりません」という意味である。
 - ②一般的な意味で、罪は病と死の原因である。
 - ③しかし、特定の病を罪の結果と言ってはならない。
 - ④この人は、癒されてからも罪を犯し続けている。
 - ⑤イエスからの警告が与えられた。

*38年の病気以上の悪いこととは、永遠の苦しみのことである。

- (3) この人は、ユダヤ人たちに密告した。
 - ①感謝の思いから出たことではなく、これは、責任逃れたための行為である。

IV. 反発への回答 (16～18節)

1. 反発の矛先はイエスに向かう。

「このためユダヤ人たちは、イエスを迫害した。イエスが安息日にこのようなことをしておられたからである」(16節)

- (1) 2つの理由
 - ①安息日に癒しを行った。
 - ②癒された人に、床を運ばせた。

2. イエスの回答

「イエスは彼らに答えられた。『わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです』」(17節)

- (1) 確かに神は、天地創造の後も、宇宙の運行を支えておられる。
 - ①すべての生き物は、神によってその命が保たれている。
- (2) イエスは、神を「わたしの父」と呼ばれた。
 - ①ユダヤ人たちは、神を「私たちの父」を呼んだ。
 - ②「わたしの父」という呼びかけは、父と対等であるということを意味している。
 - ③これは、イエスの神性宣言である。
 - ④ユダヤ的理解では、長子は父と同格と見なされる。
 - ④ユダヤ人の指導者たちは、それを理解した。

3. 殺意の始まり

「このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである」(18節)

- (1) 福音書で、イエスに対する殺意が初めて登場する。
- (2) 理由は2つある。
 - ①安息日違反
 - *イエスがメシアであるなら、安息日を守るはずである。
 - ②神への冒瀆である。

結論

1. パリサイ人たちの問題点とは何か。
 - (1) 彼らは、癒された人ではなく、その人が床を運んでいるのを見た。
 - (2) 彼らの関心は、人間の命ではなく、口伝律法に向かっていた。
 - (例話) 集会中の事故にどう対応するか。
 - (例話) 贖罪の日でも、救急車だけは走る。
2. ご利益信仰の限界とは何か。
 - (1) この人は、癒された。
 - (2) しかしイエスは、この人にこう警告された。

「見なさい。あなたはよくなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるから」

- ①38年の病以上に悪いこととは何か。
- ②安息日を守ることは、終末的期待に関係していた。
- ③「もっと悪い事」とは、終末的裁きのことであろう。
- ④この人のイエスに対する態度は、罪人のそれである。
- ⑤ご利益と呼べるようなことがあったとしても、それは人を真理から遠ざける。

3. ヨハ5章の病人とヨハ9章の盲人の違いは何か。

(1) 古代の文学は、対比によって論点を鮮明にするという特徴がある。

- ①ヨハ9章では、生まれつきの盲人が癒されている。
- ②ヨハ5章とヨハ9章には、対比がある。

(2) 対比

①共通点

- *ともに、癒しを受けた。
- *ともに、恵みによる癒しであった。
- *ともに、イエスによって見い出された。

②ヨハ5章の病人は、癒しを受けただけで、信仰に至っていない。

- *責任転嫁
- *イエスから警告を受けた。
- *その後で、イエスについて密告している。

③ヨハ9章の盲人は、信仰に至っている。

- *事実を証言し、そのための犠牲を払っている。
- *その後、イエスに見い出された。

*ヨハ9:38

「彼は言った。『主よ。私は信じます』。そして彼はイエスを拝した」

「ベテスダの池での癒し(2)」

§ 049 ヨハ5:19~47

1. はじめに

- (1) 難解な箇所であり、困難を覚える。
- (2) 口伝律法の中の安息日に関する論争が始まる。
 - ①38年間病気であった人の癒しをきっかけに、論争が始まる。
 - ②§49~51まで、安息日論争が続く。
- (3) A. T. ロバートソンの調和表
イエスは、安息日に病人を癒し、パリサイ人たちに対して自らの行動を弁護する。
(§49) (今回は、5:19~47を取り上げる)

2. 論争のポイント

- (1) ヨハ5:18
「このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである」(ヨハ5:18)
 - ①イエスは、自分が神であると主張した。
 - ②パリサイ人たちは、これは冒瀆罪に当たると判断した。
 - ③それに対して、イエスは反論した。
- (2) 判断の難しさについて
 - ①商品広告
 - ②裁判(鳥取不審死裁判。2名を殺した罪で死刑。状況証拠しかない)
 - ③総選挙
 - ④きょうは、裁判員になったつもりで、聞いて欲しい。

3. アウトライン(ヨハ5:19~47)

- (1) イエスと父は一体(19~29節)
 - ①行動において
 - ②愛において
 - ③権威において
- (2) 4つの証拠(30~47節)
 - ①バプテスマのヨハネ

②奇跡

③父

④聖書

4. メッセージのゴール

- (1) イエスを誰だと言うか。
- (2) イエスを信じる者の幸いとは何か。

このメッセージは、イエスの業と主張について考えようとするものである。

I. イエスと父は一体である (19～29 節)

1. 行動において

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行うのです」(19 節)

- (1) 一般的な親子関係において、これが言える。
(例話) 中村勘三郎と2人の息子(勘九郎、七之助)
- (2) ここでの「子」とは、絶対的な意味での「子」である。
 - ①英語では、「The Son」である。
 - ②定冠詞があり、Sが大文字である。
- (3) 「子」には、自己判断による行動はない。
 - ①父がしておられるように、子もする。
 - ②38年間病気だった人の癒しは、父の御心であった。

2. 愛において

「それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。また、これよりもさらに大きなわざを子に示されます。それは、あなたがたが驚き怪しむためです」(20 節)

- (1) 父と子の愛の関係
 - ①完全な愛の形がある。
 - ②愛の関係に基づいて、父は子に自分の思いと行動を子に示す。
- (2) 愛という動詞

①ヨハ3:35では、アガパオウが使われている。

「父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった」

②ヨハ5:20では、フィレオウが使われている。

③ヨハネは、父と子の愛の関係を描写するために、両方の動詞を使っている。

(3) 「さらに大きなわざ」

①肉体の癒し以上のもの

②魂の癒し

3. 権威において

「父が死人を生きかし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました」

(21～22節)

(1) 死、いのち、裁きなどは、神の主権に属する事項である。

①ユダヤ人の日々の祈りの中に、「死者を甦らせる神」という言葉がある。

(2) イエスは、父の代理人(シャリア)として行動している。

①ユダヤ教は、法的意味での代理人という概念を受け入れていた。

②父の代理人であるがゆえに、父と同じ権威を持って行動する。

③三位一体の教理では、イエスは父と同じ神性を持つ。

④しかし、イエスは父とは異なった位格(person)を有し、父に従順である。

(3) 永遠のいのちは終末的概念であるが、すでに実現した概念でもある。

①イエスを信じる者は、すでに永遠のいのちを得ている。

(4) 裁きもまた、終末的概念である。

「また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです。このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです」(27～29節)

①「人の子」とは、ダニ7:13～14に登場するメシアの呼称である。

②「人の子」は、メシア王国を統治するようになる(裁きも含まれる)。

③すべての人に復活の時が来る(ダニ12:1～2)。

④この箇所は、業による救いを教えているのではない。

*ヨハネの福音書の教えは、新生による救いである。

*新生した人は、善行という実を結ぶようになる。

⑤この箇所は、2種類の復活について教えている。

⑥聖書の他の箇所の教えを参考に、復活についてまとめてみる。

*信者の復活は、2段階で実現する。

・携挙

・地上再臨

*不信者の復活は、千年王国の終わりに起こる(黙20:11~15)。

II. 4つの証拠(30~47節)

はじめに

(1) イエスは、忠実な代理人として行動している(30節)

①モーセや旧約聖書の預言者たちは、神の代理人と見なされた。

②神の権威に支えられた奉仕である。

(2) 31~32節

「もしわたしだけが自分のことを証言するのなら、わたしの証言は真実ではありません。わたしについて証言する方がほかにあるのです。その方のわたしについて証言される証言が真実であることは、わたしが知っています」

①イエスは、旧約聖書の原則を紹介している。

*死刑に処する場合、2人、または3人の証言が必要(申17:6、19:15)。

②「証言する方がほかにある」とは、神を示す婉曲語である。

1. バプテスマのヨハネ(33~35節)

「あなたがたは、ヨハネのところをやりましたが、彼は真理について証言しました。といっても、わたしは人の証言を受けるではありません。わたしは、あなたがたが救われるために、そのことを言うのです。彼は燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で楽しむことを願ったのです」

(1) ヨハネは真理について証言した。

①イエスを「世の罪を取り除く神の小羊」と呼んだ(1:29)。

②イエスは、人間の証言を必要としない。

③しかし、聞いている人たちが救われるために、ヨハネを証人に出している。

(2) 「燃えて輝くともしび」

①手持ちの燭台、ランプ

②ヘロデ時代のランプは小型で、ろうそくの灯程度の光しか発しなかった。

③ヨハネがいかに偉大だったとは言え、その影響はわずかであった。

2. 奇跡 (36 節)

「しかし、わたしにはヨハネの証言よりもすぐれた証言があります。父がわたしに成し遂げさせようとしてお与えになったわざ、すなわちわたしが行っているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わしたことを証言しているのです」

(1) イエスが行った奇跡は、ヨハネの証言よりもすぐれた証言である。

①父の御心に沿った業である。

(2) 「わざ」は複数形になっている。

①いくつもの奇跡があった。

②ベテスダの池での癒しは、そのひとつである。

③最初のメシア的奇跡は、ユダヤ人のツァラアト患者の癒しであった。

3. 父 (37～38 節)

「また、わたしを遣わした父ご自身がわたしについて証言しておられます。あなたがたは、まだ一度もその御声を聞いたこともなく、御姿を見たこともありません。また、そのみことばをあなたがたのうちにとどめてもいません。父が遣わした者をあなたがたが信じないからです」

(1) イエスがヨルダン川から上がると、天から声がした。

「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」(マタ3:17)

①イエスに必要なのは、天父の証言だけである。

②パリサイ人たちは、天父の声を聞いたこともなく、その姿を見たこともない。

(2) シナイ山の麓にいたイスラエルの民は、シャカイナグローリーに触れた。

①彼らは、仲介者モーセを通して、神のこばを受け入れた。

②しかし、それ以上の啓示(御子)が与えられたのに、イエスと同時代のユダヤ人たちは、その方を信じない。

4. 聖書 (39～54 節)

(1) 39～40 節

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません」

①聖書には「〇〇をせよ。そうすれば生きる」と教えている箇所がある。

*申30:6 参照

- ②ラビたちは、「〇〇をせよ。そうすれば来たるべき世で生きる」と解釈した。
- ③「聖書の中に永遠のいのちがある」とは、そういう意味である。
- ④イエスは、その聖書が自分について証言しているという。

*旧約聖書は、メシア預言で満ちている。

- ⑤従って、イエスを拒否することは、聖書を拒否することである。
- ⑥彼らは、口伝律法という眼鏡を通してしかモーセの律法を解釈できなかった。

(2) 41～44 節

- ①父の代理人は、父の名によって来た。
- ②代理人を拒否することは、その人を遣わした方の権威を拒否することである。
- ③イエスを拒否することは、父を拒否することである。

(3) 45～47 節

- ①彼らはモーセ（五書）を信じると言うが、そのモーセが彼らを訴える。
- ②なぜなら、モーセはイエスについて証言したのだから。
- ③イエスを信じないということは、モーセを信じないということである。

結論

1. イエスを誰だと言うか。

- (1) イエスは、自分が神であるという主張をしていない。
 - ①これは、事実反する。
- (2) イエスは、自分が神であると主張した。
 - ①イエスは、嘘つきであり、詐欺師である。
 - ②イエスは、誇大妄想狂か、精神異常者である。
 - ③イエスは、事実そのようなお方である。

2. イエスを信じる者の幸いとは何か。

- (1) 父と子は、愛において一体である。
 - ①「キリストの内にある」とは、父と子の愛の交わりの中に置かれていること。

(2) ロマ8:38～39

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」

- ① (例話) 幼児期の父親との関係が問題という方への助言